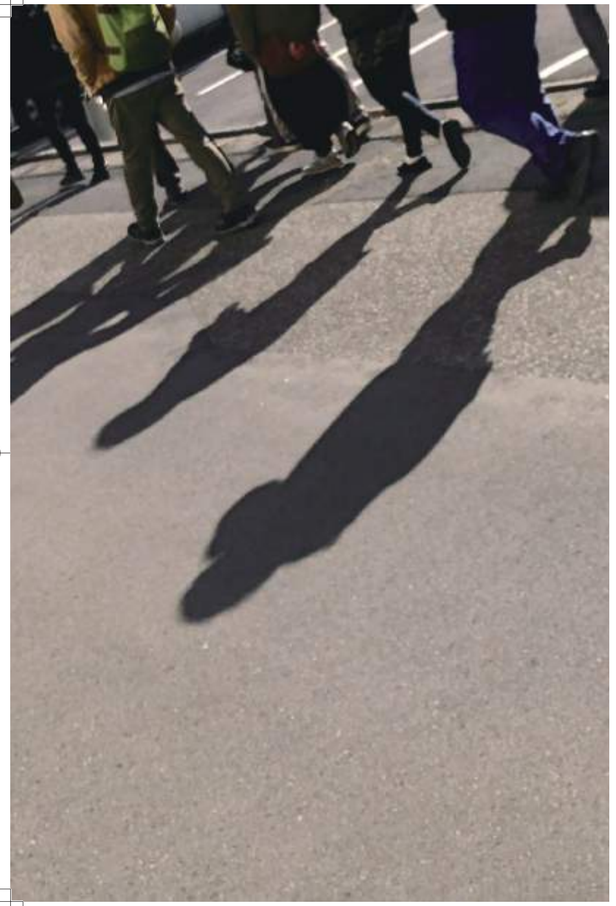
LIBERTE



「ちくわがうらがえる」

［展覧会］

期　　間｜2020 年 11 月 1（日）～ 11 月 30 日（月）
会　　場｜特定非営利活動法人リベルテ
http://chikuwa.npo-liberte.org
企画アドバイザー：山極満博　野村政之　助成：日本財団

［ちくわがうらがえるイベント］

〇本展（リベルテメンバーによる作品展）
会　　期｜11 月 1 日（日）～ 11 月 30 日（月）
会　　場｜roji

〇 S.S.G. の昆虫採集展
リベルテメンバーの S.S.G. さんが作る石膏粘土の作品を、市内8店舗のお店のどこかへ自然な感じで潜ませ、街の人に見つけてもらう展覧会。8店舗のうち、3箇所にちくわのハンコがあります。
3 つ見つけてスタンプを押してリベルテのメンバーのサインをもらうと、後日「ちくわッペン」が手に入ります！

会　　期｜11 月 1 日（日）～ 11 月 30 日（月）
会　　場｜上田映劇　コトバヤ　犀の角　26bldg.　Value books Lab.　papetree　本屋未満　ステンドグラスまどいろ工房

〇御菓子処 千野での和菓子の販売
リベルテへ通所しているマーリンが描いたねこの絵をモチーフにした和菓子 “こはく糖”「ちくわがうらがえる」を販売します。
会　　期｜11 月 1 日（日）～ 11 月 30 日（月）
販売場所｜御菓子処 千野
定　　価｜1 袋5個入 400 円（税込）

〇「ちくわがうらがえる」トランプの販売
リベルテメンバーとスタッフの作品が裏面に印刷された、眺めるだけでもたのしいリベルテのトランプであり、作品集でもあります。
販売開始｜11 月 1 日（日）～
定　　価｜1箱 3,000 円（税込）

〇 soin cafe での MASASHI ISHIAI 作品展と創作料理の提供
リベルテメンバーの石合さんの作品をモチーフにした創作料理の提供と石合さんの作品展。創作料理と創作スイーツが提供されます。
会　　期｜11 月 1 日（日）～ 30 日（月）
会　　場｜soin cafe

〇 MOSH！（共催企画／主催：特定非営利活動法人上小地域障害者自立生活支援センター）
竹乃湯内に設置した木枠の家に、上田市内の小中学生といっしょに、ダンボールやリベルテで作成している素材を使ってオリジナルの「ホーム」をつくります。また作った家の一つを本展の会場に移築し、2 日間展示します。
木の家 WS｜11 月 19 日（木）、20 日（金）
展示期間｜11 月 21 日（土）～ 27 日（金）
会　　場｜竹乃湯
移　　築｜11 月 28 日（土）

roji

路地の奥にひっそりとあるこの家が、本展会場となった。
2021 年春から、リベルテはこの展示会場で障害者総合支援法に基づく計画相談事業をはじめる。
事業所名は「roji 路地」。

はじめに

3 年前、「リベルテはちくわがうらがえった場所だ」と思いつき、それがどういうことなのか考えながら、最初は「ちくわをうらがえす」と言ってイベントを作ろうとしていたみたいです。

障害のある人にとって世界は、自分の部屋や家であり、ケアを受ける機会がある人は施設との往復に限定されたりします。その人からしたら、何が障害となっているか「わからない」ことが多い。診断通りの「障害」が世界を閉ざしているのだろうか？ 「障害のない」人は「障害がある」ということが実際にはどういうことか「わからない」。そのことが、まさしく「障害」となってお互いを世界から隠していってしまう。

福祉施設で、アートで、社会を、世界に向けていくということは、その「障害」を貫いて人の意思と自由を照らすことだと思います。障害のある人の世界が、表現されたアートを手がかりに、この世界を変えていく。この本は「ちくわがうらがえる」という「意味がわからない」テーゼ（そのままイベント名にした）を手がかりに、スタッフとメンバーと、アートイベントを企画し実施した記録です。

NPO 法人リベルテ代表 武捨和貴

窓から見える風景展

嘉澄幸村 | かすみ・ゆきむら

prelude ー前兆ー　210 × 420　パネル、画用紙、鉛筆、水彩色鉛筆　2020

猫が見上げる「もうひとつの世界」

彼は 7 年前に市内のイラスト・漫画教室に通うところから制作を本格的に始めた。現在は、手描きでストックしている数千に及ぶ羽や鍵や人物や人体の各部位のパーツ・素材を「sai」などのソフト上で構成・編集している。イラストレーション専門誌『季刊 S［エス］』の投稿や、第 22 回アートムーブコンクールではキットハウス賞を受賞して個展を開催するなど、リベルテ以外の場でも作家活動を精力的に行っている。

振り返りの中で彼は、「自分がやりたい本当の制作は何なのか」確認できたと言っていた。それほど彼の中には彼自身の世界が強固に存在し、だからこそ作品の中の「存在しないはずの猫」が窓の向こう側に描かれ「もうひとつの世界」を見上げていたのかもしれない。

竹内聡子 ¦ たけうち・さとこ

窓から見える風景　210 × 420　パネル、画用紙、鉛筆、水彩色鉛筆　2020

見つけた世界から交わす視線

ごめんなさい。と頭を下げる謙虚な姿と、漫画を制作する時のテーマを揺るがせにしない強さが、竹内さんの作品を魅力的にしている。普段、アトリエで制作している漫画は、取材ノートのメモ、スケッチなどを基にコンテを描く。次は鉛筆による下書きだ。この時点で描写の密度は高く、完成されている。そこから墨入れ、文字の清書を済ませ、白黒コピーしたものを簡単に綴じて完成だ。

今回、トーベ・ヤンソンのような作品を描きたいと竹内さんは言い、色鉛筆で濃淡をつけた。柔らかい色彩の中、屋根に寝転ぶ子どもはムーミンの夢を見ているようだ。庭にいる犬や猫はこちらにいるぼくたちを「見つけている」。聡子さんの謙虚な眼差しに「庭に棲むものたち」が気づき、こちらを見つめ返してきたのかもしれない。

AN ¦ あん

想うは懐かし、されど色褪せずとも　210 × 420　パネル、画用紙、油彩　2020

瞬間、この世界の中心で

週 1 回のアトリエ活動が継続できればいいが、何かと AN さんの周りには課題が多く降ってくるようだ。だからこそ、彼女の「目の前にあるもの」に対する瞬発力やカンが冴えるのかもしれない。

パネルからズレた枠や、窓を開けて大きく映える羽の蝶。目撃した一瞬、切り取られた際の違和感。それを描こうと思わなければこぼれ落ちてしまう世界の瞬間。その「瞬間」が展示会に並び鑑賞されることで、それが「かたち」となって見た人の世界に現れる。たとえ作家自身がその完成度に満足していないとしても、鑑賞者が見ることで作品を成立させる。油彩という時間のかかる技法に反するような偶然性の定着の試みが、作品となった瞬間、世界の中心を描きだす。

みのり ¦ みのり

無題　210 × 420　パネル、画用紙、鉛筆、アクリル絵の具　2020

開けられた窓の向こうに溶ける言葉

みのりさんは自宅で漫画やイラストを描いている。今回の制作は、彼女のこれまでのルーティンから外れ、家の外の空気に触れ、自宅や室内とは違う場所で制作することに向き合う日々でもあった。

非現実的な窓の向こう側の世界を、マゼンダとブルーの対比というクラクラと強烈な色彩で表現している。窓は開けられていたのか、それとも描かれた両手で「わたし」が開け放ったのか。消え入るように描かれた言葉はもしかしたら、開けた瞬間に飛び去っていったのかもしれない。日々の繰り返しから逸脱したとき、改めて、その外側にある世界から自分を知り、そして更新していく。制作というのはまさにそうした繰り返しで、リベルテに在を置き半年だが、その短い間にも彼女は、彼女の世界を更新させていく。

S.S.G（Sunrise Snow Garden　和名：昇雪庭）¦ えす・えす・じー（さんらいず・すのー・がーでん　）

ちくわの窓から見た光景　210 × 420　パネル、画用紙、鉛筆、アクリルガッシュ　2020

もうすでにちくわはうらがえっている

S.S.G さんはリベルテの見学後、リベルテに通うために自宅での 1 年間にわたる修練を自身に課した。そんな人を、S.S.G さん以外にぼくは知らない。

画面の中でサッシの柵が歪んでいる。実際は窓やサッシであるはずの枠の部分が「ちくわ」になっている。どうやら覗いている側にいる人が「ちくわ」から外を見ている。つまり、作品を見ている人が「非現実的な世界」から「現実の世界」を覗く構図になっている。窓の外に非現実が広がっている作品が多い他のメンバーとは世界が逆転している。裏返っている。穏やかな人柄からは想像できない、世界の鋭い描写にドキリとする。もうすでにちくわはうらがえっている。

メンバー感想

◎みのり

今回の展示に声を掛けられ、選ばれたことが嬉しい。久しぶりにキャンバスに触れていい機会になった。いいものが描けたので、絵がどんな風に展示されるのかが楽しみで、搬入も参加したいと思うほどだった。

「窓から見える風景」というテーマが、今まで挑戦したことない視点だったので面白かった。造形物だけを描くというのが難しく、どうすれば自分の描きたいものを表現できるのかという点に苦心した。表現したい色やモチーフが先にあって、言葉にするのは難しいけれどアンダーグラウンドな世界観が出せたらというのを心がけた。

展示作品の制作を終えて、リベルテの普段の活動の中でパネルに絵を描くことを続けている。腕をなまらせないためにも描いているが、今後は自分の作品をパネルやグッズなど形に残して、誰かの手に届けばいいなと思う。

◎竹内聡子

参加したメンバーの中で絵の勉強をしている人がいて、アーティストの名前や流行のスタイルなどを知っていて、いい意味のカルチャーショックを受けた。また、窓を見学し、どんな絵を描くか意見交換したときに、普段みている様子と違った一面を見れた。今後も絵の話などしていけたらと思っている。

作品作りは、色鉛筆画をあんなに大きく描いたことがなかったので楽しかった。幾重にも色鉛筆を塗り重ねるので、色がぶれて濁らない様に気をつけた。学生のころ、家でよく水彩画を描いていたが、その時は濁ってしまって嫌で捨ててしまったりもした。今回はそうならないように気をつけた。

バーナデット・ワッツのようなカントリーアートの夢のある世界を描きたくて、日常の中にファンタジーが入り込んでいるようなものを表現したかった。普段リベルテの活動で描いている絵は反対に、上田のまちのそのままを切り取って描くようにしている。普段と逆のことをしてみた。思い描いていたように、まあまあ表現できたと思う。合格点をあげられる絵になった。見に来る人には色使いに注目してほしい。また、犬や子供の姿をみて、ほっこりあったまってもらえるとうれしい。

今後も大きいイラストをまた描いてみたいと思っている。馬場金物店の風景が好きで描きたいが、ヨタをしてしまって描けなくなってしまった。あとは、もっと今の流行りの絵や手法の勉強をしたいなと思った。それが漫画にも必ず影響してくると思うので。

◎ S.S.G.

参加したメンバーは作風もそれぞれで、見ているところが違うと感じた。都市が出てきたり動物がいたり、使う画材も異なって、その違いを感じながらできたのが良かった。また、絵について学ぶことが多く、下地の塗り方を変えるなど自分の創作の参考になった。モチーフを絵の中にたくさん入れるのは、窓展で学んでから創作に活かしている。水族館の絵は、たくさんの生き物を入れて描いてみた。

作品に関しては、窓から見える風景を見に行ったときにブロック塀が目に入って、普段は家の一部であるブロック塀を中心に描こうと思った。観る人それぞれが観たいように観てもらえたらと思っている。期限までに間に合うかドキドキだった。始まる前の自分に声をかけるなら、「できましたよ」。いい勉強になった。

◎嘉澄幸村

筆で絵を描くことも、アナログな作品に挑戦することも、はじめてのことばかりだった。筆に触れるのは中学生以来ということに気づいて、びっくりした。家族には制作期間中「楽しかった」と話していたらしいが、自分では必死だったので覚えていない。

同じテーマで描いたので、出来上がってみて皆の作品が凄いなあと感じている。各メンバーの作品を見てもらいたい。歪ませたり、色の使い方、盛り方だったり、色んな人の表現方法を見ながらの制作過程で、メンバーやスタッフとコミュニケーションをとれたことが楽しかった。今回参加したことで、これまで描いてきたものが自分のやりたいことなんだ、ということにも気づくことができた。自分の作品は縮こまったなという印象。でも、始まる前から縮こまるだろうなと思ってはいた。もっと描けるかなとも思ったけれど。最初に描こうと思ったものと違うものになっていった。いつもの自分なら、勝算のあることに挑戦したいのだけれど、勝算のない挑戦だった。ここでいう勝ちは、暴れきること。この短い期間ではそれができなかった。本当は1年位かけてやりたい。“底意地の悪い”（ブログにそう書いてあった）企画者の落とし穴にまんまとはまったなというのが感想。リベルテだったからこそ完成まで持ってこれたなと思う。

◎ AN

制作後半になって時間的制約があり、絵の具で進めようと思っていたところを工夫して生まれたのがクラフトテープで代用した今回の作品だった。自分の制作スピードと締め切りのデッドヒートだったけど、なんとか収まった。

今回の窓展、自己表現の仕方を探る機会だったと感じた。フォローに入ってくれたスタッフが、一緒にその表現を探してくれるのが楽しかった。他の人にあって自分にないものをすごく感じた時間だった。誰かの「こうしたほうがいい」という指示で描くのではなく、それぞれが描きたいもの、自分の好きなものをガッツリ描けたことが、それぞれの作品の個性の広がりに繋がった気がする。

木と箱

米袋、ダンボール、木っ端
そのとき、そこにあるものが
素材になり、表現を媒介し
作品やグッズになることがあります
だれにでも手に入り
できてしまいそうなことも
並べ方や時間をかけることで
何かになっていきます

無題　木、イベントカラー　2020

YUKI ¦ ゆーき

モテと成長の間で

YUKI さんがリベルテに通所したのは、ある女性メンバーに会うのがきっかけだった。土曜日だけの通所をはじめてまた違う女性メンバーに夢中になり、今は彼女の方が彼に夢中だ。そうやって家族や支援者以外から好意を向けられたことで、どれだけ彼は肯定されただろうか。恋愛的な関係の中でどれだけ感情を揺さぶられただろう。

手先が器用なメンバーが多い中、彼にできることは多くはない。しかし、好きなことには全集中。今回の作品は、木材のヤスリがけから「芸能人のヒロミみたいな DIY を」と生まれた。今は、好意を向けてくれている女性メンバーが入院したので、千羽鶴を折っている。どちらも、作業としては淡々としたものだ。チャラいパリ男グラサン（パーティー大好きな男の人が好むようなサングラス）を着けて作業しているにも関わらず、表情は真剣だ。

無題　245 × 280　クラフト袋、ダンボール、イベントカラー　2020

（上）無題　450 × 400　クラフト袋、ダンボール、イベントカラー　2019
（下）無題　220 × 220 × 70　クラフト袋、ダンボール、イベントカラー　2018

TA-4 ¦ ティーエーフォー

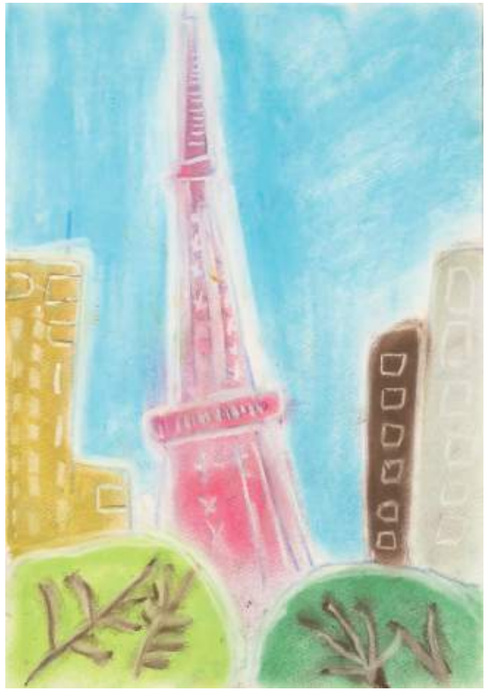
愛着と眼差しのコラージュ

ダンボールや、お米や穀物が入っていたクラフト袋にイベントカラーを塗ったものを細かく切ってコラージュした作品は、最初は数人のメンバーによる「色ダン」という名称の素材づくりの仕事として始まった。彼の作品は他に、鉄道を擬人化したものや、オリジナルのストーリーを背景に描くイラストがある。

今回展示した作品はクラフトに近いかもしれない。趣味の「乗り鉄」や「撮り鉄」のために行く駅や電車のダイヤのように、複雑かつ正確な幾何学模様の色ダンとなっている。電車の沿線ごと決められている色を反映させるなど工夫を凝らす中で、段々と細部のこだわりや全体の構成への意匠が生まれてきたようだ。彼が撮影する電車や鉄塔の話はとてもおもしろい。そんな彼が制作する色ダンは、彼の愛するものへの眼差しが意匠化されている。

無題　610 × 470　クラフト袋、ダンボール、イベントカラー　2018

自慢焼きとチオビタ



東京タワー　井出勝利　350 × 250　画用紙、パステル　製作年不明

松本城の庭の池　井出勝利　380 × 540　画用紙、パステル　製作年不明

無題　井出勝利　540 × 765　画用紙、パステル、クレヨン、マジックペン　製作年不明

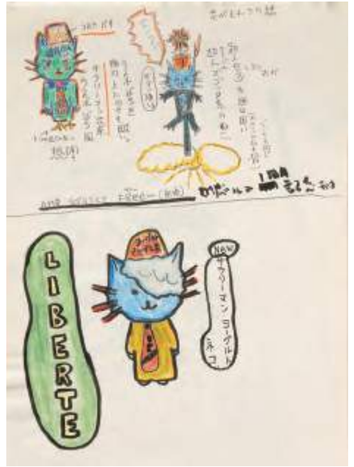
無題　井出勝利　160 × 230　クロッキーブック、パステル、オイルパステル　製作年不明

ルヴァン　井出勝利　380 × 540　画用紙、パステル　製作年不明

ルヴァンのくるみパン　井出勝利　270 × 380　画用紙、パステル　製作年不明

オムライス KURAYA　井出勝利　180 × 260　画用紙、クロッキーブック、パステル　製作年不明

リベルテ　井出勝利　540 × 765　画用紙、パステル、オイルパステル、マジックペン　製作年不明



無題　井出勝利　295 × 210　画用紙、パステル、鉛筆、筆ペン　製作年不明

無題　井出勝利　210 × 295　クロッキー帳、水彩色鉛筆、鉛筆　製作年不明

ルヴァンのくるみパン　井出勝利　210 × 285　クロッキー帳、鉛筆　製作年不明

無題　井出勝利　160 × 230　クロッキー帳、パステル　製作年不明

フルーツの盛り合わせ　井出勝利　180 × 260　画用紙、パステル　製作年不明

無題　井出勝利　210 × 295　画用紙、パステル、鉛筆、ボールペン　製作年不明

井出勝利 | いで・かつとし　（1969–2014）

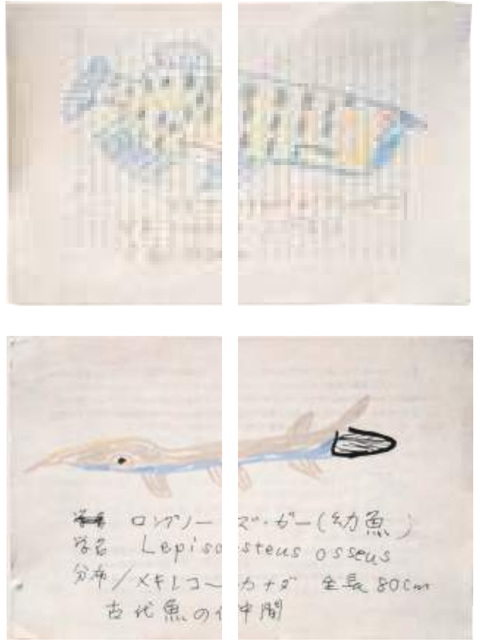
アトリエの人

2013 年、リベルテの福祉事業所としてオープンしたスタジオライトの開所式で、井出さんはくす玉を割るヒモを引いてくれた。基幹相談支援センターのスタッフから「絵を描くのが好きな人がいるんだよ。自宅で描いたコピー用紙、束で持ってきて見せてくれるんだよ」と紹介され会ったのが彼だった。

スタジオライトがオープンして最初の展示で、彼の作品をギャラリーの土間部分に展示した。その頃は、ウサギのキャラクターをモチーフとしたファンタジックな作品を描いていた。週 1 回の利用から始まり、亡くなるまで通所してくれた。初めて週 5 日利用してくれた人でもある。開所当時、食事は提供していなかったから、スタッフの黒岩がジップロックコンテナにつめた“お弁当”を「まずい」とニヤニヤしながら頬張っていた。様々な画材を独自に試す人で、リベルテでパステルに出会い、色鮮やかな静物や風景を遺した。2014 年 11 月に亡くなった。

その年の夏、ぼくと初めて“外食”し、オムライスを柳町の「蔵屋」で食べた。その後しばらく、オムライスの作品を描き続けた。兄弟で支援を受けていて自宅での生活が中心だったが、リベルテに通うようになってから街に出ることが増え、モチーフは柳町の町並みやリベルテのアトリエにあるもの、家で食べたのも、そして思い出の風景へと変わっていった。描く量は通所前と変わらず、スケッチブックを何冊も描き潰していた。その姿を見て、「リベルテは絵を描いていい場所なんだ」と多くのメンバーが認識し、口数の少ない彼を慕っていた。

（左より）（判読不能）　澤井秀二　305 × 220　ボール紙、イベントカラー、ボールペン、顔料ペン　製作年不明 / 白牡丹　澤井秀二　140 × 95　ボール紙、イベントカラー、ボールペン、顔料ペン　製作年不明
タイサンボク　澤井秀二　275 × 195　ボール紙、イベントカラー、ボールペン、顔料ペン　製作年不明 / シロヤマブキ　澤井秀二　275 × 195　ボール紙、イベントカラー、ボールペン、顔料ペン　製作年不明



（左より） アエオニム　澤井秀二　300×210　雑誌、ジェッソ、顔料ペン　製作年不明 / アヌビアス・ナナ　澤井秀二　145×100　雑誌、ジェッソ、ペン　製作年不明 /（上）アジアアロワナ　澤井秀二　120×180　雑誌、ジェッソ、ペン　製作年不明
（下）ロングノーズ・ガー（幼魚）　澤井秀二　100×150　雑誌、ジェッソ、ペン　製作年不明 / 無題　澤井秀二　150×100　画用紙、色鉛筆　製作年不明 / 色鮮やかなランの花　澤井秀二　150×100　画用紙、水彩絵の具　製作年不明

澤井秀二 | さわい・しゅうじ

チオピタドリンクまでの遠さ

「ここタンコブできてないか?」と眉をひそめながら、髪の毛を掻き分けて気になるところを見せてくる。大丈夫そうだけど、と答えると「ぶつけてしまったから、病院行かないとなぁ」とか何とか言い「はいよ、今日の分」と、作品を提出してくれる。何だか作品を取り立てているみたいな気持ちになるけど、調子が良ければ週1日1時間だけアトリエに来てくれていた澤井さんとのコミュニケーションはそんな感じだった。話していないと、自身の通院の予定を優先させて通所しなくなってしまう。

ぼくらが澤井さんの体調を気にかけていることを知ってくれていたから、晩年の通所はリベルテに「週 2 日、半日も」通所してくれたのだ。体調が目に見えて悪く、受け入れ先が見つかるまでの支援とはいえ、「福祉施設として」受け入れに反対するスタッフもいるような状態だった。澤井さんは体調が安定せず、イライラもしていた。何とか入院先が見つかり、そこから「チオピタ（ドリンク）買ってきてほしい」と電話かけてくれていたけど、なかなか行けなかったな。

まだ元気で週 1 回 1 時間の通所をしていたときも、晩年に緊急で受け入れていたときも、草花や魚の図鑑から描くモチーフを選び、色鉛筆や顔料ペン、マジックペンなどで描くことを日課にしていた。図鑑に載っている全てを描こうとしていた。今思うと、不器用で頑固で、こちらの意図に添おうとしてくれる真面目さが、本当に澤井さんらしかった。

クマヤナギ　澤井秀二　305 × 220
ボール紙、イベントカラー、ボールペン、顔料ペン　製作年不明

せかいはうらがえる

山極満博

── わたしが意識することと
わたしたちが意識できないこと

そもそも他者って、誰のこと

不特定多数という少数？！

仮定は過程…。

つくりあげねばならない世界は
わたしの知らないわたしたちの世界。

妄想と隔たりのない想像力があふれると
ときに社会からあぶれることもあるが、、、

そうやって世界は欠けているからこそ
想像力を必要とし、そこで修正されて拡がってゆくしかない。

あなたのせかいはあなたをかえる？！

やまぎわ　みつひろ

おもな展覧会、活動として 2010 年「知覚の扉」豊田市美術館および喜楽亭（愛知）、2015 年「宇宙をみる眼」志賀高原ロマン美術館（長野）、「ここに棲む - 地域社会へのまなざし」アーツ前橋（群馬）、2016 年「Welt in Liestal」Kunsthalle Palazzo Liestal（バーゼル）、2019 - 2020 年「Century idee bauhaus」drj-dr.julius | ap（ベルリン）のプロジェクトに参加し［Conceptual Art Foundation］Stiftung konzeptuelle Kunst（ソースト）にコレクションされる。2011 年「eine landschaft entwerfen」ZELLWEGERPARK（チューリッヒ）、2019 年「し～ん。」小海町高原美術館（長野）にて個展。十和田市現代美術館（青森）とアーツ前橋（群馬）にコミッションワークによる作品が美術館内外に常設展示されている。

やってみたこと

何かをやってみると反応が起こります
やらなければそれなりですが
やってみたことで世界は
わたしを揺るがします

うまくやろうとすれば苦しいですが
それでもやることで世界は
そこにあるのだと気づきます

○トークイベント「ソロソロ、コロナ」　○MAP とハンコ　○昆虫採集展
○soin cafe とのコラボレーション　○御菓子処 千野とのコラボレーション
○ルポ「リベルテのある街」　○CM　○MOSH!　○トランプ制作

トークイベント『ソロソロ、コロナ』

時間銀行をケーススタディに“コロナ禍と時間の在り方”を探る

新型コロナウイルスにより社会状況がよりいっそう悪化したことで、今までとちがう人とのつながり方が求められている。そこで、貨幣ではなく誰でも平等に持っている時間をシェアする「時間銀行」と、上田で新しい立会文化をつくろうとはじまった「のきした」をテーマとして、2020 年 9 月 19 日に犀の角にてオンライン・トークイベントを開催した。哲学者の山森裕毅さん、ケース提供者の野川未央さん、「のきした」のもとしましょうさんの 3 人が語り合った。

時間銀行はお金一極集中に風穴を開ける

「時間銀行」というのは、「時間」を交換単位にして、自分ができる「サービス」をメンバー同士でやりとりする仕組みのことです。工藤律子さんというジャーナリストのルポ『つながりの経済を創る』を読んで時間銀行のことを知り、強く惹かれたのがきっかけです。

現代社会では、お金を使ってモノを買う、サービスを手に入れるのは当たり前のことです。家庭の経済力によってできることが変わる子ども時代から、学生になってアルバイトをしてお金を稼ぎ、手に職を得てお給料をもらうようになりますが、私たちはお金がないと基本的なニーズも満たせないし、お金があればよりたくさんのことができるという風に、お金に左右されています。そういう当たり前を全部ひっくり返すのは無理でも、切り崩していくひとつの方法が時間銀行というコミュニティーだと思っています。

時間銀行は、「どんな場所でどんな働き方をしたとしてもその価値に優劣はない」「お金をもらってする仕事だけが仕事じゃない」「コミュニティーのみんながお互いを信頼して尊重する」という価値観を基本にしています。みんなに平等に与えられている「時間」を共有し合うことで、持ちつ持たれつ、お金に依存しなくても人とつながることで豊かな暮らしを実現できるんじゃないか、というアイディアでもあります。

人の役に立つ経験が蓄積されることの効用

家族との関係が良くて頼れる友だちもいる、という人ばかりではありません。それが難しい人たちもいる。そういう人たちも、みんな今、この上田、この日本という社会で暮らしているわけで、地縁血縁に縛られすぎずに時間を融通し合うことで何か新しいものがつくっていけるんじゃないかと、この時間銀行のコンセプト、アイディアに出会った時にすごく希望を感じました。私が仕事でよく行く東ティモールでは、家族の概念が日本の 10 倍くらい大きくて、誰かが必ず助けてくれる人間関係があります。仕事がなくても誰かが食べさせてくれるし、住む場所も提供してくれる。だから、いわゆる野宿者がほとんどいないんですね。そういう社会です。

また、日本では「人に何かしてあげる」という時に「自分は何もできない」と言う人は少なくありません。特別な技能を持たずとも、ちょっとしたことで人の助けになることは本来たくさんあるにもかかわらずです。だから、時間銀行には「これはできない」「あれを持っていない」という減点法のマインドセットを更新する力もあるのではないかと楽しみにしています。

では、どうやってこの時間銀行を広げていけるかが、私たちの頑張りどころだと思います。仲良しグループ、仲間内で終わってしまったら、本来の意義に近づけないような気がします。若い人からご高齢の方まで、普通に生活を続けていたら出会うことがないような人たちが参加しているコミュニティー、時間銀行であって欲しいし、そうありたいと願っています。

ケース提供者：野川未央（のがわ みお）

NPO 法人 APLA 事務局長。高校時代のスウェーデン留学から「生きやすい社会」について考えはじめ、その後、大学の恩師の影響で東南アジア地域に関わる。2008 年に入職した APLA では、主に東ティモールとインドネシアでの事業を担当し、農村部での循環型農業や環境保全活動に取り組んできた。日本社会の問題を解決する一手段として「時間銀行」を勉強中。東京が拠点だが、2006 年に両親が上田に移住したことをきっかけに縁ができ、「のきした」に関わっている。

トークを終えて

ステージの上で横に 3 人並んで、コロナ対策のアクリルボードにはさまれて話をするというのは初体験で、トークのテーマとあいまって、まさに「ちくわがうらがえる」感覚でした。あのような空間と時間を共有させていただけて感謝です。（野川 未央）

制度化された時間から放り出されて

哲学とは、当たり前や常識とされているものをもう1回考えてみる、というものです。コロナ禍で、これまで当たり前に機能していたものが機能不全に陥っているので、コロナ禍自体が哲学的状況というか、考える機会を与えてくれているんじゃないかなと思います。

ここで考えてみたいのは、コロナの前ってどうやったっけ？　ということ。わたしたちはいろんな場で、誰かと共にいる時間を当たり前に過ごしてきました。となると、休憩、休日もだいたい合わせられているほうが便利だよね、という風にして「制度化された時間」を共有することでわたしたちの社会は成立してきました。

「制度化された時間」というのは僕が勝手に名付けてますけど、これが何をもたらすかというと、人との出会いやすさ。人と共にいる時間と離れて過ごす時間の調整のやりやすさ。将来の計画の立てやすさですね。

すごく頑張らなくても「タイミング」と「融通」がうまく回る場

コロナ禍によって、その制度化された時間がほつれたと思うんです。失ったものだけを数えるのはやめて、「ほつれた時間」が贈り物だったとしたらどうなんだろう？　という提案、切り取り方をしてみたいと思います。

贈り物のひとつとして、出会い損ねてきたものとの出会い直しがあったかなと。能力を発揮させられない状況によって無力にさせられるという「ディスアビリティ」を疑似的に体験したこともすごく重要だったかもしれません。

さらに、制度化された時間を問い直す機会にもなりました。自分で裁量できる時間が本来はあったはずなのに、これまでは社会に合わせて時間をつくっていたので、なかった。

それが自分のところに戻ってきた時に、すごく持て余してしまう。主体的であることのしんどさを感じましたね。

今、制度化された時間の共有が徐々に修復・再建されつつあります。コロナ禍という私たちにとって特別な時間にもし終わりが来ているとすれば、それから何ができるのか考えておきたいと思います。

制度化されているが故に楽なことはありますが、「それしかない」となると話は別です。支えもお金しかないのは辛い。椅子が4本足で立つように、支えがいくつかあれば良い。この「ちくわがうらがえる」が与えてくれたひとつの問いは、「助かる文化の時間の在り方とは何ですか」ということだと思うんです。福祉をやっていると助ける／助けられるで成り立つ関係があるけれど、助かるはその枠をはずすんですよね。それってどういう場のあり方かというと、ひとつはタイミングです。助かったというのは、「この時にこの人がいてくれた」とか、「こんな時にこんなことが起こった」ということですから。もうひとつは、融通が効くかどうか。助かるというのは助けた側が「俺はあの人を助けてやった」ではなくて、「ちょうど今飯食った。ほやから今時間あんねん」みたいなことです。こういうタイミングと融通がうまく回る場のあり方、時間のあり方がもし設計できるなら、助かる文化に近づくのではないでしょうか。

哲学者：山森裕毅（やまもり ゆうき）

大阪大学 CO デザインセンター特任講師。研究分野は哲学プラクティス、精神分析、当事者研究など。対話や表現によるエンパワメントや質的展開のメカニズムに関心を持つ。学生たちには、社会の片隅に追いやられて弱くさせられている人たち（自分たち自身も含めて）の声を丁寧に聴き、自分の思いとことばと行動でそれに応答できるような授業をしている。

トークを終えて

リモートでお話して以来ですね。「のきした」や「時間銀行」は順調に進んでいるでしょうか？　どんな人たちと出会ったのか？　どんなことが起きたのか？　続きがめっちゃ気になってます！　ぜひまたお話を聞かせてください〜。（山森 裕毅）

助かる文化づくりを根づかせるために

僕は別所に住んでいて、上田に下りるときにたまにヒッチハイクしているおじいちゃんがいるんですよ。一度乗っけて郵便局まで送ったらおじいちゃんが2000円くれて、いまだにしっくりこない感覚があります。だから今日、運転免許のない未央さんに「拾ってくれませんか？時間のツケ払いで」と言われて、とても気持ちよかったんです。未央さんから払ってもらった時間で今度は誰かに何かやってもらえるかもしれないと、つながりが確保される安心感みたいなものがありました。

コロナがあって、ゲストハウスと劇場を運営している「犀の角」と、僕らが行っている支援活動で何か一緒にできることはないかということで、自宅以外の拠り所や居場所づくりを目的に、「のきした」という名で新しい場を考えています。犀の角は多様な人が集まり表現を行うことに価値を見出す場。僕らの活動は、学校や家庭などに居場所がない人を助けることが目的。そこで問題意識が合致して、のきしたという新しい価値観をつくろうといろんな人が集まってきています。リベルテのメンバーが犀の角の劇場スペースでイベントやカフェを運営していたこともあって、このタイミングで「助かる文化づくり」をできたらいいなと思っています。

雨風をしのぐ場所に新しい価値と文化を宿す

のきしたは、雨風から家屋を守るための軒の下。単に困っている人を救うだけでなく、今、雨風をしのぐ場所を作ることによって空間が生まれ、そこに新しい時代の文化がつくれるんじゃないか、というイメージです。もうひとつ、犀の角のゲストハウスを困っている人に気軽につかってもらう「やどかりハウス」も考えています。今すすめている時間銀行も、もちろんのきしたになり得ます。そういういろんな面で助かることを再発見していく取り組みがのきしたと思ってやっています。

僕は日々相談支援をやっているので、助ける側／助かる側という立ち位置が否応なくできてしまう。それをどう崩すかを考えないことにはうまくいかないと日々思ってやっています。なので、何か助かるきっかけがいっぱいあるといいなぁと思っていて。たとえば、日本は若い子たちがたくさん自殺で亡くなっています。現場感覚としては、さまざまな矛盾を引き受けている家族の中で、いちばん弱い立場にある人にしわ寄せが行って自殺まで追い込まれていると感じます。親が悪いというような単純な話ではなくて、家族に色んなものが押し込められすぎているからだと思います。だから、家族以外のさまざまな関係性がもっと生まれないといけないと感じるんですよね。

のきしたをやってみてハッキリしたのは、お金がなくて困っているように見える人も、お金以外に頼るものがないからこそ、お金がなくなって困っているんじゃないかということです。お金がなくても人とのつながりがあれば困らないで済むかもしれない。やっぱり、何か違う価値をしっかり見つけなきゃいけないんだろうなと思っています。

のきした：もとしま しょう

NPO 法人場作りネット副理事長。1983 年、熊本県出身。学童保育勤務、引きこもり支援を経て、2011 年、仲間とともに富山県高岡市に「コミュニティハウスひとのま」を設立。多様な人たちが集まる、24 時間 365 日開けっ放しのみんなの家、駆け込み寺となる。2018 年 4 月、長野県上田市に家族で移住。NPO 法人場作りネットを設立し、各種相談支援事業を運営、現場でのソーシャルワークを行いながら、地域に雨風をしのぐ場「のきした」などの場作りに取り組んでいる。

トークを終えて

あの頃、川の流れが堰き止められ、渦巻く水が溢れそうで、今後、我々はどこに流れれば？　という切実さの中にあった。でもあれ以降、いいところに流れ始めたと思っています。いい時間でした。ありがとうございました。（もとしましょう）

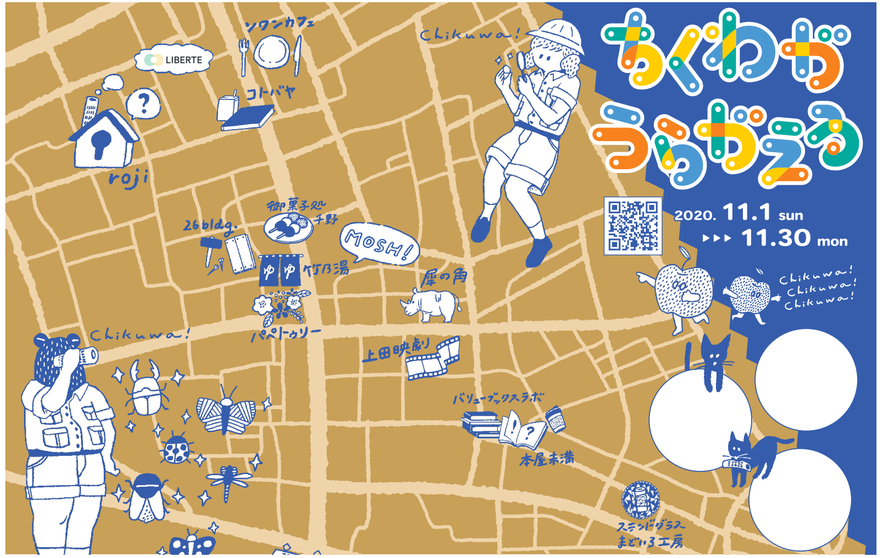
司会：最越あると（もうつあると）

1988 年生まれ。リベルテに所属。21 歳のときイラストレーターを志して、絵の勉強を独学で始め、主に美人画を描く。その後、家族の影響で人々の精神性と知性を豊かにしたいという想いが強くなり、絵に向き合う中で感じた物足りなさから、想いを果たすために物語の勉強を始める。物語は創作を始めて 4 年目、いまは 3 部 1 編の物語を制作中。その内 1 部が最近完成した。オンラインゲーム「REDSTONE」は 15 年目。
（プロフィールイラスト：嘉澄幸村）

「時間銀行」や「のきした」のやりたいことって、助け合いだと思うんですよ。トークを通して改めて、「その価値は何だろう?」「家族や友だちとの関係や時間は、価値や意味がどう違うんだろう?」「助け合うことでどんな意味や価値があるんだろう?」といろんなことを考えました。

たとえば医師と患者さんだと、一般的には診てあげる方が偉くて、診てもらう方が下というイメージがあると思うんですけど、俺、最近ちょっと違うなって思っているんです。助けることにも価値があるし、助けられた人が助けた人に感謝できること、支援されることにも価値があると思うんですよ。今回のトークを聴いて、「いつの間にかできている関係」ができていることが一番いいと感じました。

MAP



イベントが始まる前からちくわは何度もうらがえっていて、もはや表も裏もないような感じになっていることにみんな薄々気付きながら、それぞれ大いに楽しんでいた、その感じが愛しくてすごく面白かったです！

（Seico Aoyagi）

ハンコ

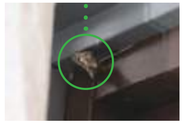
ちくわ（にせものですばらしい）を3つ渡されて「これを『ちくわ』のひと文字ずつのハンコにしてみるのはどうか」といわれたときは（このボコボコしてて穴の開いたちくわを?）とすこしだけ悩みましたが、ちくわにとっては「ちくわの穴をふさがない」ということが一番大切なのではないかというところに落ち着き、思った通りに文字をあてることが出来て良かったです。

（タカハシハンコ店）

昆虫採集展

papetree

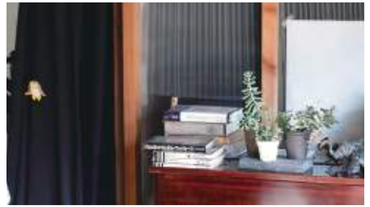
アゲハの幼虫！



おもしろそう、当店にマッチしそうな企画だなと参加。かわいいなと感じた。
昆虫 3 匹をつれて帰ったらそれぞれ潜むのにぴったりな場所が見つかりうれしかった。開催中、本物の昆虫アゲハの幼虫が店内に侵入しそのままサナギになるという出来事があり、来たお客さんにはそれも含め楽しんでもらえて思いがけないコラボとなりました。
(サナギは現在冬眠中)

（山崎 めぐみ）

犀の角



これまでのつながりからリベルテメンバーさんの作品が犀の角に飾られるのがうれしいのと、ちくわがうらがえるの企画に興味があり参加。作品をさりげなく窓辺へ置いただけなので、ちくわがうらがえるの事を知らない人には気づいてもらえなかったかも。県外から来た宿のお客さんに、「ち、ちくわあるんですか……?」と聞かれて驚きました。コトバヤさんで聞いたそうです。

（荒井 舞）

コトバヤ

どんな虫が出てくるのか興味があったし面白そうだと思った。親しい近さにあるリベルテだから自然と参加しようとなりました。昆虫採集のことを周りに伝えることが楽しくて、伝えると「面白い!」との反応。毎日ほんのり楽しくて、あの虫が店にあることが嬉しかったです。

（高橋 さとみ）

26bldg.

街歩きしながら昆虫、アートを探すという内容が面白いと参加。採集してお店に潜ませるという行為が楽しかった。昆虫がお店に馴染み、お客様に「これおいくらですか?」と聞かれたのがまた面白かった。MAP だけでは全体の流れが分かりづらく、もっと一般の方に参加してほしかったな。MOSH! の中学生の採集も楽しみだったが、予定変更や天候の関係で短縮になってしまい残念……。

（宮嶋 絵美子）

Value Books Lab.

リベルテさんの頼みとあらば! と参加しました。昆虫（という名のペンギン）は驚くほど当店になじんでおり、昆虫を持っていこうとすることもがお母さんに怒られるのを見ながら（昆虫が盗難に遭いそうになる店なんて面白いなあ……）とぼんやり思ったりしていました。楽しかったです!

（池上 幸恵）

本屋未満

まちなかでリベルテの昆虫を採集できるだなんて最高の取り組みで、「ち・く・わ」のハンコを集めるのもとても楽しかったです。お客さんに「ちくわ……ありますか?」と訊ねられるのも、「あ〜! うちの店はちくわ無いんですよ〜!」と答えるのも唯一無二の体験でした!

（池上 幸恵）

上田映劇

メンバーさんが作った昆虫を街のあちこちに展示するという発想にぜひ! と参加。コロナ禍のなか、密にならず、街全体を巡ってアートに触れられる画期的なイベントだと実感。独特なゆるさもリベルテさんだからこそ出せる味だったなと。期間中、飾ってあったペンギンに子どもたちは喜んでいた。子どもも大人も、ちくわハンコも含め、楽しんでました。

（長岡 俊平）

ステンドグラスまどいろ工房

「存在する」「それだけでいい」という企画書の言葉に共感、何かお役に立てればとの思いで参加しました。「そこに昆虫がいる」ということだけで、他店舗やリベルテ、作者とのつながりを感じることができました。また、そんなつながりは日常の中の別のシーンにおいても感じられることなんだなと改めて思いました。

（綱島 美絵）

MASASHI ISHIAI 展@ soin cafe

「ちくわがうらがえる」に合わせて、soin cafe（ソワン・カフェ）にて、石合昌史さんの作品展を開催した。soin cafe は高橋真弓さんと樋口郁映さんのふたりが営むカフェだ。作品展が終わった後の 1 月 14 日に開いたふりかえり会の様子を、リベルテの新田なつきがまとめた。

プライベートでも遊ぶほど仲のいい 3 人

石合昌史さんは、soin cafe オープン当初からの常連さん。真弓さんと郁映さんは、当時パティシエだった石合さんにケーキ作りを教わったり、その後石合さんがリハビリ中から始めた絵を欠かさず見せてもらったり、そんな交流を続けて 10 年以上、3 人はプライベートでも遊ぶほど仲がいい。

2020 年 10 月にリベルテ代表・武捨から「石合さんの絵をお店に飾って一緒に何かできませんか?」と持ち掛けた。1 ヶ月間、soin cafe のおふたりにも表現者になってほしい、自由にやってください、と。

イベント開始1週間前に彼の絵が届いた。届いたのは、4 枚の自画像。背景が緑、ピンク、黒と 1 枚ずつ異なるもの。そして、鉛筆で描かれたもの。

会期を前半後半に分け、絵を元にデザートを郁映さん、料理を真弓さんという風に分担して考えたという。初めはおふたりとも観たままの印象で料理を作っていたが、毎日自画像と向き合ううちに、次第に絵や自身の心と対話するようになっていったという。後半は、絵から受け取ったものを料理に表していた。

絵から得た感覚をふたりのアートに

黒い自画像からは、色とりどりのジャムを配したパレットに見立てたデザートを。シンプルな鉛筆画からは、野菜たっぷりのトマトクリームパスタを考えた。

郁映さんは言う。「石合昌史はいつも前を向いて一つ一つ進んで行く。そこに私はすごく勇気をもらった。あと、いつも人生を楽しんでいる。そんな彼の人生自体がパレットのような気がして。パレットが人生で、色が経験で。食べる人にも、それをお皿の上で楽しんでもらえたら」。

「私は鉛筆画から、『シンプルって何?』と考え続けた。自分のシンプルは“初心”だと思い至った。今自分が料理をしているのは、『パスタが好き!』という原点があったから。じゃあ、私が一番好きなトマトクリームの野菜たっぷりのパスタを作ろう!　と思って」と真弓さんが続けた。

絵から受けた感覚をふたりの中のアートにして出す。それを食べた人たちが、また違うものを生み出す――。そんなキャッチボールができたら楽しい、という思いから作った料理とデザート。食べ方や受け取り方は「受け取ったままでいい」とお客様に委ねていた。

いろんな感覚が開く鑑賞体験

「僕はとても感動したんですよ。」と、実際に soin cafe で食べた野村さんは言う。

「食べるのもホントおいしかったし、ジャムをつける行為がまた絵を描いて食べているような感覚にもなって。料理自体は人の手によるもの、でも素材は自然の形、という対比も面白いし、食べ終わった後のお皿が、洗っても色が落ちないパレットみたいになるのもカッコよかった。食べている間じゅう、色の組み合せを考えたり、素材の舌触りや噛みごたえを感じたり。いろんな感覚が開く可能性がある、一種の鑑賞体験だなと感じました」。

ふたりは「野村さんのように、すごくいろいろ感じて受け取ってくださるのもうれしいし、単純に『おいしい!』でもうれしい。まずは受け取って下さったことがうれしい!」と口を揃える。

来店してくれた人の愛情がうれしかった

会期中はイベントを目指して来た方、知らずに来た方と、さまざまなお客さまがいらした。FM 長野パーソナリティ・高寺直美さん（上田市出身）もいらして、番組内でイベントのことを紹介して下さっている。また「実は私、『ちくわがうらがえる』に関わっているんですよ」という方が何人も来店し、ふたりは日々訪れるお客さまから多くの愛情を感じ取っていたという。

「このイベントの宣伝はしてないんですよ。でも、石合さんに関わる人たち、リベルテに関わる人たちが『何だろう?』と来てくださる。この愛情ったらないじゃないですか!」と真弓さん。

「それに、石合さんの奥様が料理のことをすごく深く受け取って下さって。これは、石合昌史を知っているからこそ生まれた作品たちだと言ってくれました。見た目がインパクトのあるケールスープのことは、『見立てはパンチが効いているけど、中身（味）はあっさりしている』とか。こういう感覚は、奥様ならではだなって感じましたね」と振り返る。

絵が見せてくれた目に見えない繋がり

かねてより続いていた石合さんとの温かな交流がベースにあってのこのイベント。「石合昌史だから引き受けたというのが大前提。やってみたら、ふだんからの目に見えない繋がりがポンと視覚化されて楽しかった。今回『ちくわがうらがえる』というお題をいただいたこと、絵があったことで改めて向き合った自分たちの気持ちは、すごく深い感性の旅でした」と、目に見えないものの大切さをすごく学んだと、おふたりが話してくれた。

郁映さんが言う。「はじめは作者に『何か表現してほしいことある?』って聞いたんですよ。でも、特には……と（笑）。途中また改めて聞いてみた時は、『よかったと思う』って（笑）。石合さん、何か感想は?」

「僕は、黒い絵がお気に入りで一番いいと思ってたの。でも奥さんにはあまり人気がなかった」

「でも、あの絵からパレットができたんだよ!　あの対比は、人の見えている面や見ている面は一部分でしかない、ってところから広がって生まれたんだよ」。

イベント終了日、絵を仕舞う前に 4 枚を並べてふたりで覗き込むように写真を撮った。自分たちのために「楽しかったね」と言い合いながら。

ふりかえり会からの帰りの車中、「僕は今日あまり話さなかったけど、このイベントが無かったらこんな話はしなかったってことだもんね。すごいね」。石合さんがゆっくりとポツリと話した。

---

soin cafe ふりかえり会　2021 年 1 月 14 日（木）18:30 ～ soin cafe にて

【参加者】soin cafe: 高橋真弓さん 樋口郁映さん
石合昌史さん（リベルテメンバー）　野村政之さん（ドラマトゥルク）
リベルテ：黒岩友香　新田なつき

（左）会期後半のデザートのテーマは「パレット&楽しむ」。
（中）soin cafe にとってのシンプル=原点である「トマトクリームパスタ」。
（右）soin cafe はリベルテから徒歩 3 分のところにある

石合さんと自画像

MASASHI ISHIAI ¦ いしあい・まさし

昌史さんと家族と障害と

パティシエとして働いていた 32 歳の時に、脳硬塞の後遺症で右半身まひと失語障害を患う。入院中に弟から贈られたスケッチブックとクレヨンで、日記のように絵を描き始めた。2013 年 10 月からリベルテのアトリエに所属している。

病気や障害は人を孤独にする。しかし実際は、「どうしたらいいのかわからない」故に、周りの人が離れていくことが多い。その問いに、教育も社会も科学や医療、そして福祉も真正面から答えることを避けているからだと思う。「関係の障害」だ。

彼は入院中に結婚した。パートナーの晶子さんが、障害や病気を彼だけのものにせず、彼の友人やぼくにも関係あるものにしてくれた。「どうしたらいいのか」を夫婦の関係を介して翻訳し、「関係の障害」を溶かしていく。共にいる。それだけが、難しくも、愛おしく、そしてとても大事なことなのだ。

こはく糖「ちくわがうらがえる」

わたし“ももクロ”こと「ももいろクローバーZ」が好きで、真生（まさき）はももクロメンバーのアーリンになぞらえて自分のことを「マーリン」と呼ぶようになったんです。そんなマーリンが、わたしの娘です。

マーリンとコラボのお菓子を作ってほしいとお話があり、どんなものを作ろうかと考えていたときに娘のスケッチブックを見てみたら、色とりどりの猫の絵が描いてあったんです。

あの人は200本ほど水性ペンを持っていて、色に対してすごく興味を持っています。それで、この猫をモチーフに、昔ながらの和菓子「琥珀糖」を作ることにしました。色付けは、4食の食用色素をですね、ばーっと撒いて箸でぐるぐるっとミックスさせて仕上げています。パッケージはデザイナーの小松さんにお任せして、とても素敵に仕上げていただきました。

「ちくわがうらがえる」オリジナルこはく糖は、予想を上回る売れ行きでした。真生も一緒に作ったからか、毎日売れ行きを気にしていましたね。仕事で親子が関わるのは初めてで、ありがたい経験ができました。また機会があれば、リベルテの皆さんとお話しながら、こんなお菓子がつくれたらいいなと思っています。

（御菓子処 千野　店主 千野雅芳）

この原稿は pp.68 ～ 69 の「『ちくわがうらがえる』をふりかえる会」での千野さんの発言をまとめたものです。

ルポ「リベルテのある街」

■取材・文：今井浩一　■撮影：村上圭一　■取材同行：くりもときょうこ　新田なつき

リベルテは何によって構成されているのか？　そのヒントのひとつがこの上田の街にある。
決して内に閉じこもることなく街に漏れ出ながら存在しているリベルテと、時に交わり、時にエールを送り合う人々との交歓の記録。

ちくわがうらがえれば――いつも、ちぎれてしまう
コトバヤ　高橋さとみさん

コトバヤさんは長野県内のブックカフェの先がけだ。けれど目を凝らさなければ本がどこにあるかわからない。いや、そんなことはない。ただ店主の高橋さとみさんを慕うように集まってきた雑貨、古道具などがペチャクチャと話しかけてくるので、本棚よりも気になってしまうのだ。高橋さん自身がつくった消しゴムはんこもさほど主張することなく佇んでいる。コーヒーを淹れている小さなカウンターの横には、九州が発祥の乳酸菌飲料「ヨーグルッペ」が販売されている。二階では古物市や展示をやることもあるし、初めて店にやってきたお客さんがそのまま数カ月も滞在していったなんてこともある。柳町の古民家を利用した建物の雰囲気と相まって、なんとも居心地がいい。

「このなんでもありの空間に入ってくるものはなんでもあり」。名言だ。ケラケラとまゆ毛を上げて高橋さんが笑うと、つられて口元が緩む。「縁というか、いいと思うものが来るというか、そういうものしか来ないというか。でもあったらうれしいし、ありがたいです」

お店にある品物同様、お客さんたちも自然と引き寄せられ、歩を向けてしまう人ばかり。

「以前の場所からここに移転して5年目になります。お店の始まりは、VALUE BOOKSと侍学園が共同で運営するブックカフェの話があって、ご縁と成り行きで雇われ店長になりました。お店をやりたいというより、お店をゼロからつくることに興味があって。そこで5年くらいたったとき、そろそろ自分でやってみたら？　と背中を押してもらったこともあって場所を探し始めて、柳町にたどり着きました。私はそんなに計画性がありません。先の先まで考えられないのと、すごく呑気だから。コツコツやっていればなんとかなるかなとやってきました」

ふと見回すと、全国の福祉施設の商品もポツポツと並べられていた。そこにはリベルテのメンバーのカラフルなグッズももちろん置かれている。

柳町通りには個性豊かなお店が並ぶ。通りの端っこ同士のコトバヤさんとリベルテがこの通りの緩やかな雰囲気を醸し出しているように感じられる。「武捨さんとは、普段はお互い『ふふっ』て会釈を交わすくらい」だけれど、リベルテからスタッフやメンバーがちょいちょいやってくる。逆に高橋さんが遊びに行ったり、送迎スタッフとして働いたりもしている。

リベルテと協力して、『ちくわがうらがえる』スタンプラリー用の手づくりちくわはんこもつくった。「ちくわが裏返る様子を想像するんだけど、いつも最初の段階でちぎれてしまうんです。あ、ちぎれる、ちぎれるなーって」と笑う。

「このままおばあちゃんになってもいいなぁと思うけど、コトバヤ＝高橋じゃなくていいんです。誰かがやってくれてもいい」と気張らない。そんな高橋さんをある友達が「脱力ファイトだね」と言い当てた。

2020年をもって、「まともに飲んだこともなかったところから淹れ始めた」コーヒーの提供をいったんやめることにした。ブックカフェがカフェではなくなる。カフェスペースをなくして、そのぶん本棚が増え、店舗を持たずに活動している本屋さんのコーナーもできた。もうずっと柳町通りの一角にあると錯覚してしまいそうになる佇まいのコトバヤだが、少しずつ季節が動いていくように、変化している。

たかはし さとみ　上田西高等学校時代、現侍学園理事長の長岡秀貴さんが担任で、VALUE BOOKSの中村社長が同級生だった。卒業後、東京にてペンキ屋で装飾全般を経験する。引っ越し屋でも楽しく働く。2010年より侍学園スクオーラ・今人に所属。サポートステーションシナノの1階にて、「コトバヤ」を始める。2016年4月から今の上田市柳町にて独立移転オープン。消しゴムはんこ作家「タカハシハンコ店」として、上田映劇の「映劇はんこ」も制作。

ちくわがうらがえれば――リベルテのメンバーさんがやってくれそう。
御菓子処 千野　千野雅芳さん

上田駅お城口から県道 77 号線を少し上ったところに、昭和6年創業の和菓子屋「千野」さんはある。この私、長野県内どこに行ってもまずは、そば饅頭をいただくことにしている。甘すぎないこしあんと、ほんのり鼻に抜ける蕎麦の香り、この素朴さにホッとするのだ。もちろん千野さんでもいただいた。

大きな声で明るく出迎えてくれたのは3代目、千野雅芳さん。東京の大学で経営を、和菓子専門学校の夜間コースで基礎を学び、24 歳の時に上田市に戻ってきた。

「父や当時いらした職人さんにいろいろ教わりながら仕事を覚えていきました。当初は若気の至りで伝統をぶっ壊すのがかっこいいと思っていたんですけど、やっていくうちに、そんな薄っぺらいものではないことがわかり、今では和菓子の奥深さに魅力を感じています。積み重ねや歴史の中から生まれてきた形がある、和菓子の背後にある季節の物語をしっかり押さえたい、それが専門店の在り方だと思っています」

とはいえ、リベルテに通う娘さん、マーリンこと真生（まさき）さんからいろいろ新しい情報を聞き、驚くことも少なくないと言う。例えば最近も、横浜流星主演ドラマ「私たちはどうかしている」が和菓子屋の物語だったこともあり、若い女の子の間で「こはく糖」に注目が集まっていることを知ったのもマーリンからだった。

「今までにはいらっしゃらなかった若いお客様がお越しになる。小中高生のお客様が季節の上生菓子を買ってくださるんです。どうしたんだろうと思っていたら、そういうことかと。だったらあまり渋い色のものばかりではなく、少しカラフルなものをとつくってみたら評判が良くて」

実は「ちくわがうらがえる」の期間中に販売した、猫型をしたカラフルな「こはく糖」は、いわばマーリンとのコラボ商品。マーリンがリベルテで描いていた、紙いっぱいの猫の顔のイラストからヒントを得たのだそう。千野さんにもマーリンにも、いつも以上にキラキラとして、甘く美味しい仕上がりになったことだろう。

かつては商店街ぐるみで、「いってらっしゃい」「おかえり」の挨拶とともに、ごく自然にマーリンが通学するのを見守ってくれていた。マーリンはコミュニティの一員として地域に溶け込んでいた。思春期になったマーリンにはその距離感が少し照れくさいらしいけれど、千野さんはそうした街の懐の深さに感謝している。だからこそメンバーが社会とつながることを基本とするリベルテの姿勢に大いに共感している。

「アートを窓口に表に出ていく活動をされているのは素晴らしいと思います。そうならばとメンバーさんの作品を商店街に並べて、お客様に回遊していただくような企画も考えています。もちろん作品のレンタル料もお支払いして。ポップアップショップも面白いかも。とにかくリベルテさんのテーマでこの街を遊んでもらえたらと、商店街の理事会でも相談しているんです」

そんな千野さんにも、ちくわがうらがえるについて聞くと「飼い猫の名前がちくわなんです。うちのはいつも寝っ転がって裏返っています」とまずは大笑い。

「それこそコペルニクスのようなとんでもない発想で裏返す人と会ってみたい。私はリベルテさんのメンバーさんの中から現れるという予感があります。その時はおわっと驚きたいです」

もちろん可能性を秘めた一人にマーリンもいる。美しい和菓子に囲まれて育った彼女は、いつも大量のフェルトペンを持ち歩き、それを一面に広げて絵を描く。色に対するこだわりはきっと父譲りなのかもしれない。

「リベルテさんには、マーリンなりのことをやっている様子を尊重して、面白がっていただいている。今年は娘の絵をＴシャツにしてもらったので、家族そろって着ています。街でそのＴシャツを着ている方を見かけると思わず頭を下げたり（笑）。僕らはついもっと上手に描きなよなんて言いがちですけど、自由にやらせていただいている中から、面白いものが生まれるんですよね」

ちの まさよし　市内の高校を卒業した後、東京経済大学、東京製菓学校を経て、父の跡を継いで御菓子処 千野の代表に。赤い機動甲冑を身にまとい、「ズク」という気力エネルギーをパワーに変えて戦う「六文戦士ウェイダー」のプロデュースにもかかわっている。

ちくわがうらがえれば――ゆらゆら帝国『空洞です』が浮かんだ
本屋未満　池上幸恵さん

「ブックス&カフェ NABO」の店長だった池上幸恵さんは、いつも優しい笑顔でコーヒーを淹れてくれた。「こんな本を探している」とお願いすればその場でパソコンを叩いて探してくれる。映画も演劇もよく見ていて、その感想をまとめた文章を読むと、行けばよかったと後悔することしばしば。目利きさんでもある。県内で本のイベントがあれば、そこでもいつもと同じ笑顔で本を売っていた。驚くのは NABO では毎日イベントを仕切っていた。池上さんは何人いたのか。

「NABO が目指していたのは、上田の街に点在しているコミュニティを出会わせる、混ぜ合わせること。本当にいろんなイベントをやりました。今の上田には、紹介したいお店が本当にたくさんあります」

イベントの中にはリベルテ関連のものもたくさんあった。武捨さんの「（本の）帯部」、メンバーによる似顔絵、ファンクラブイベント、グッズ販売などなど。

「読まなくなってしまった本を、誰かを応援するために使おう」という NPO 応援企画「FURE FURE BOOKS」では、寄付された本を販売し、集まった資金でリベルテ出版が立ち上げられ、メンバーの漫画『竹村さんちに棲む者』を出版した。

「リベルテのメンバーさんは街を普通にお散歩しているし、お店に来てくれる。作品をつくった人として、スープ屋さんとして、似顔絵屋さんとして出会えるから、普通に接することができたんです。リベルテさんが積極的に街に漏れ出させようとしてくれているから、障害があって大変そうとか可哀想とかではなく、面白がっていい部分と出会うこともできました。だから私でもできる応援の仕方が見つけられたんだと思います」

池上さんが感じた想いは、多くの人に共通する。たとえばリベルテのメンバーのアート作品は、作品だけが一人歩きせず、ちゃんとメンバーの名刺がわりになって、我々とメンバーを気楽につなげてくれている。

NABO のたくさんの活動は、いつしか自然とそのブランドとでも言うべき魅力を生み出した。本屋、カフェ、人びとが交流する場として上田には欠かせなかった NABO は 2019 年9月に閉店し、今は「本屋未満」という仮の店名をつけて営業している。ワクワクするネーミングだと思う。

『NABO（デンマーク語で隣人という意味）としての役割は一旦終え、次にどんな役割を担っていったらいいのかを見直す時期でした。良いブックカフェを街中につくりたいという想いは同じですが、NABO と違うのは新刊を幅広く入れるようになったこと。でもまだまだ空間が整っていませんという宣言として『本屋未満』と名付け、とにかくやってみますということでオープンしたんです」

隣の建物にも「バリューブックス・ラボ」がオープン。そちらは ISBN コードがない図録や昔の本、汚れがあるなどの理由で買取金額がつかず廃棄に回ってしまう分からレスキューしたものを販売している。50 円玉を握りしめた子ども、古い本を探すおじいちゃんなど幅広い層がやってきている。池上さんと VALUE BOOKS が新たな発想で古本に命を吹き込んできた数々の企画たちは斬新で、まさに、ちくわを裏返すものばかり。

『『ちくわがうらがえる』というタイトル、伺ったときにめちゃめちゃいいなあと思いました。頭に浮かんだのは、ゆらゆら帝国の『空洞です』という曲。俺の空洞を好きに遊びなよみたいな歌詞なのですが、それと同じ、好きにしてくれ感がいいですね」

そして池上さんは言う。

「ラボのお店番とか、リベルテさんが思ってくださるなら、まだまだ一緒にやれることは多いのかなって思っています」

いけがみ さちえ　短大を卒業後、大工の道に進む。しかし体調を崩し、22 歳の時に長野県に戻る。八ヶ岳のリゾート施設に併設されたブックカフェの雰囲気に一目ぼれし、頼み込んで働き始めた。2015 年より「VALUE BOOKS」所属。文筆家、土偶作家の顔も。

ちくわがうらがえれば── 裏返った世界では、ちくわが好きになっているのかも。
石井工務店　26bldg.（ニィロクビルヂング）宮嶋絵美子さん

路地はどこか秘密めいていて、知らない場所に案内してくれそうなワクワクする雰囲気がある。大人になって身体が大きくなった今は、かつてより狭くなったように感じる路地の先に、不似合いな大きさのランドセルを背負った数十年前の「私」が飛び出してくるかもと、ふと目を凝らして懐かしくなったりする。上田市は城下町とあって、防衛上の工夫が施された鍵の手や丁字路、食い違いなどを散策するのも楽しい。

石井工務店が 2017 年に原町商店街の裏手の路地にオープンさせた 26bldg. を拠点に、街に繰り出したりお客さんを迎えたりしている同社のプランナーであり、不動産も担当している宮嶋絵美子さんも、想いを馳せる。

「この道を通って学校に通っていたんです。だから愛着が強くて。昔の赤線、飲食店街だった地域で、袋町とは違う怪しさもあって、町歩きしている時にこの道いいなあ、この建物いいなあってとてもポテンシャルを感じたんです。こんな魅力的な建物があったなんて全然気づかなかった（笑）」。

26bldg. は、2012 年に廃業しイベントスペースなどとして活用されている銭湯「竹乃湯」の倉庫として使われていた建物。今は1階は工務店のアトリエ、2階はオフィスとして賃貸している。「おフロ」の建物だったことから付けた「2」「6」の名前も、毎月「2」と「6」が付く日だけオープンするというシステムもどこか小粋。宮嶋さんにとって、26bldg. から見える上田の街はどんなだろう?

「私は京都や東京で暮らしたこともありますが、やっぱり上田は人との距離感が近いですね。知り合いに会う確率も高くて、あの辺を歩いていたよねと言われたりするのは苦手だけど、それは人の温かさの裏返しでもあります。地元の工務店で働くことは、全部の仕事が自分ごとになる。知り合いだったり、これから一生付き合っていく人とのつながりになったりしますから。それは同時に上田のことを考えることでもあるので、やりがいを感じます。仕事もプライベートも楽しくなっていくと思います」

26bldg. では解体する建物からレスキューした古道具を販売したり、手仕事の展示をしたり、街歩きイベントなども行なったりしている。26bldg. を開けたことで、宮嶋さんはより街の人びととかかわるようになった。若者にリノベーションブームが広がる中、宮嶋さんや石井工務店では、空き家を開いて街を元気にしたいとの想いを抱いている。

リベルテとの出会いも、現在入居する建物の修繕を請け負ったことから始まった。

「上田に帰ってきて『地元カンパニー』という会社にいたんです。そこにいた仲間がリベルテに転職して。お付き合いが始まったのは、柳町のアトリエの修繕の依頼があったことがきっかけ。新棟の工事や仲介もしたんですけど、ゆるく仕事でかかわっていくうちに次第に武捨さんの想いに巻き込まれている気がします。一緒に街歩きをしたり、空き家を探したり、

半分仕事、半分イベントを手伝っている感覚で楽しい」

今ではクリスマスパーティに呼ばれて、メンバーと一緒に演奏したりもする関係だとか。「ちくわがうらがえる」にも「MOSH!」と題したダンポールハウスのイベントや展示などのお手伝いをした。

「ちくわ、あんまり好きじゃないんです（苦笑）。おでんに入っていたら、手をつけません。ちくわにきゅうりが刺してあるのも、わざわざ別々にしてから食べます。でもイベントが終わったら、私もちくわが裏返った世界にいるのかもしれない。そうしたら、今度はちくわが食べられるようになっているかも。ちくわについてこんなに話したり考えたりすることはもうないでしょう。でも、ちくわを食べるとき、いつもこのイベントのことを思い出すのかもしれません」

今度、蕎麦屋「千本桜」名物のちくわを六文銭に見立てた「かき揚げ」を食べに誘ってみよう。

みやじま えみこ　上田市出身。大学は京都の立命館大学文学部。建築業を目指す社会人のための学校に通い、名古屋、東京にて店舗設計施工会社に就職。その後帰郷し、地元カンパニーを経て、石井工務店に入社。街の拠点「26bldg.」では「2」「6」の付く日に滞在している。

ちくわがうらがえれば── ちくわは、ちくわだよね。
犀の角　荒井洋文さん

ちくわきゅうり?　きゅうりちくわ?　ちくわの穴にきゅうりを刺した料理の名前だ。そもそも料理なのか?　でも子どものおやつやビールの肴にあればうれしい。もっと気の利いたネーミングをしてあげられないものか。ふと思う。犀の角とリベルテはきゅうりとちくわに似ている。

荒井さんは京都の大学で演劇活動をし、静岡県の劇場に勤め、同僚だった奥さんを射止めた後で帰郷して劇場とゲストハウスが一緒になった「犀の角」をオープンさせた。2016 年のことだ。リベルテの武捨さんとは、2015 年、信州大学による「地域をつくる市民プロデューサー～地域資源を活用し、まちづくりにつなげる～」講座で出会い、夢を語り合った仲だ。

「それぞれが企画を考えて、意見を出し合って、ブラッシュアップしていくという課題があったんです。それまで武捨さんのお名前もリベルテの存在も知ってはいましたが、その課題を通して初めて出会いました。武捨さんは障害のある人がアートを通じて社会に出ていくということをやろうとしていた。一方、僕は街の中にアートの拠点をつくろうとしていた。“アート”“上田市”というキーワードのおかげで、一方は演劇、一方は福祉という別々のカテゴリーでしたが、お互いの言葉を共有しやすかったのを覚えています」

リベルテでは犀の角が軌道に乗る前から、メンバーによる作品を展示販売したり、リベルテアーツカレッジという講座の会場として利用したり、荒井さんいわく「一つの拠点としてカウントしてもらった」。そうやって紡いだ関係が、犀の角という軒下でリベルテのメンバーがカフェを運営する「リベルテの角」につながっていく。

「僕らは文化施設として街に開いていきたいと思っていたのですが、ゲストハウスの営業があるので一番大事な時間帯に劇場を開けることができていなかったんです。いつ来ても閉まっているとご指摘いただくこともしばしば。僕と妻で回していたから、昼間を一緒にやってくださる方を熱望していたんです。でも誰でもいいというわけではなく、文化活動に共感し、その価値をわかってくれる人でなければ意味がなかった。お互いの活動にリスペクトがある武捨さんに相談した結果、『リベルテの角』が始まったんです」

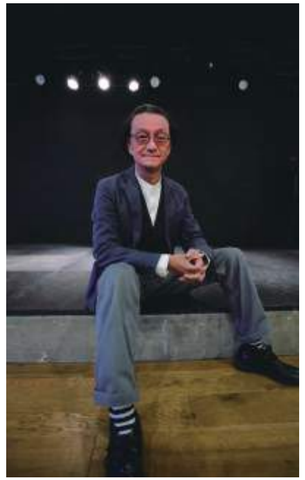
私も何度かお邪魔したが、のんびりとした空気が心地良かった。メンバーの動きも甲斐甲斐しい。とは言え順風満帆ではなかった。収入を少しでも増やしたい犀の角、メンバーが社会とつながる場をと考えるリベルテ。そもそも当てている物差しが違った。

「僕らは演劇を通して社会とかかわっているつもりだけど、福祉の支援という視点で社会とかかわるというのはどういうことなのか。言葉では理解できても、実際どういうことなのかは同じ現場を共有したことで初めてわかったというか。お互いが気持ちよく働くためには、いろんな葛藤があったし、僕にとってすごく学びになりました」

残念ながら新型コロナウイルス感染症の影響で「リベルテの角」は休止したけれど、犀の角とリベルテの新たな取り組みは、困難を乗り越え、進化した形でまもなく日の目を見る。

「いや、今でもお互いに理解できないことばかりです。でも日常で理解できないことに出会う経験はそうそうできないから非常に良かった。リベルテさんとは演劇づくりをしていると思っていて、全然文化の違う人と創作するには、どうやったら面白くなるのか、演劇人と一緒につくるのでは得られないエキサイティングなところがありますよ。そしてリベルテさんと話せば話すほど、自分たちが何者なのかが見えてくる」

「ちくわがうらがえる」への印象を聞くと、荒井さんは「ちくわは裏返っても、ちくわだよね」は両者の関係の本質だと思う。リベルテと犀の角の関係はちくわときゅうりに似ている。無理に交わらなくても、場があればうまく収まる。さしずめお客さんはマヨネーズか、お醤油か。お客さんの存在こそが、両者の取り組みを輝かせてくれるから。



あらい ひろふみ　犀の角代表・制作者・プロデューサー。上田市生まれ。同志社大学で演劇を始め、「SPAC（静岡県舞台芸術センター）」に所属。2016 年、上田市海野町商店街の空き店舗をリノベーションし、演劇やアート活動、ライブなどで使用できるイベントスペースとゲストハウスを備えた民営文化施設「犀の角」をオープン。さまざまな表現活動や地域住民・アーティストの交流の場として運営している。

ちくわがうらがえれば── 一石二鳥どころか、三鳥、四鳥、五鳥になる夢。
NPO 法人上田市民エネルギー 理事長　藤川まゆみさん

雨の日の取材ほど憂うつだ。などと思っていたら、車を降りた瞬間に水たまりに足を踏み入れてしまい、靴の中でジュワッと広がる水が気になっていた。

目の前に藤川さんが現れても、ジュワッが気になっていた。しかし社会の課題解決の夢の先を語る藤川さんのキラキラした笑顔に照らされ、モヤモヤがスッと晴れていく。藤川さん、ほんとキラキラしている。「キラキラ」なんて表現はありきたりすぎてライターとしてはかっこ悪いが、藤川さんにはぴったりのような気がした。本当にまぶしい人だ。

「上田に移住して 2 年目に鎌仲ひとみ監督（←昨年、辰野に引っ越しされていた！）の映画『六ヶ所村ラプソディー』にすごく心揺さぶられて、上田で自主上映会を開き、その後もエネルギーをテーマに勉強会やワークショップを企画していました。でも福島で原発事故が起きたときに、私はあくまでコーディネーターで、そこに参加した誰かが行動を起こしてくれると期待していたことや、自分が具体的なアクションを起こさなければ誰の心にも響かない、社会は動かないって自覚させられました。いくら勉強だけしてもエネルギーは増えない。じゃあ自分たちで電気を、自然エネルギーを1ワットでも増やす取り組みを始めようと考えたんです」

そうやってスタートしたのが「NPO 法人上田市民エネルギー」であり、「相乗りくん」というアイデアだった。太陽光発電を始めたくても、屋根にパネルを設置するには費用がかかる。藤川さんが考えたのは、パネルの設置費用を自然エネルギーを増やしたいと考える人、気候変動の問題に関心のある人、地域づくりの活動をしている人などが分担して支える仕組みだ。パネルの設置に出資してくださる方々には銀行に預けるより割のいい売電収入が入るメリットもある。2011 年秋に NPO を設立して以来、約 50 軒の屋根に太陽光パネルを設置してきた。

藤川さんが市民活動にかかわるきっかけになったのは、千葉県の盲学校の生徒さんたちの作品に衝撃を受け、故郷の広島県福山市で彼らの展覧会を開いたこと。自分で何かを企画するのは初めてだった。

「どうしてこんなにエネルギーのある作品がつくれるんだろうって驚いたんですよ。私の周囲の皆さんは盲学校の子どもたちのために展覧会を企画してあげているのねと応援してくれたんだけど、全然そうじゃなかった。彼らの作品には根源的なエネルギーがあるから、そのエネルギーにみんなで触れたいと思っただけなの」

そんな藤川さんだから、アートを通じてメンバーさんが社会とつながることを目指すリベルテと出会うのに時間はかからなかった。NABO の「FURE FURE BOOKS」で一緒になったり、メンバーが働く「リベルテの角」でランチをしたり、時にはリベルテで話し込むことも。

「リベルテのスタッフさんと話していて感じるのは、福祉だけを見ていないんですよね。街のあり方、人のあり方を考えながら活動している」

藤川さんの放つ光に包まれたのか、武捨さんも上田市の持続可能な未来を考える上田ビ

ジョン研究会に参加している。藤川さんが描く次なる理想は、車を持たなくても暮らせる社会。

「皆さんは実現が難しい取り組みだと思われるかもしれません。そういう意味では、私がやろうとしていることも、ちくわを裏返すことだと思うんです。もし車ではなくて電車やバスで暮らせたら、近所の商店街で買い物をしたら、地元の病院を使ったら、地域が元気になる。障害を持つ方々も街が歩きやすくなる、防災を意識した街づくりもできる、二酸化炭素を出さない街になる。もう一石二鳥どころじゃないんです」

温かく、優しく、強く未来を育もうとする藤川さんは、まるで上田の街を照らす太陽のよう。外は小雨、私の靴は相変わらずジュワッのままだが、心は火照っていた。そして太陽が照らすのは別に上田だけではない。我が家の屋根にもこの春には相乗りくんの太陽光パネルがやってくる。

ふじかわ まゆみ　広島県福山市出身。大学時代を大阪で過ごし、縁あって上田市に居を移す。2007 年に発足した映画上映実行委員会「六ヶ所会議 in うえだ」の活動が母体となり、自然エネルギー信州ネットの後押しで、2011 年 11 月より市民主導型・参加者が主人公の発電事業「太陽光パネル相乗りくん」を開始。住宅や店舗などへの太陽光発電所の設置をコーディネートしている。

ちくわがうらがえれば── ドーナツの穴を食べてみたい。
NPO 法人上田映劇 支配人　長岡俊平さん

ちくわがうらがえる──「そのネーミングを伺ったときに、ちくわの穴をイメージしたんです。そこから食べ物の連想で、ドーナツの穴が浮かびましたね。ドーナツの穴を食べてみるのは、どんな感じだろうなぁ。一番はそういう視点が面白いと思いました。リベルテのメンバーさんの作品の表現とか、僕たちにはない視点やエネルギーもあるし、裏返ったときにどうなっていくんだろうと、すごく哲学的な思いになります」

そう語るのは上田映劇の若き支配人、長岡俊平さん。旧くから上田市の文化、娯楽の拠点として親しまれている上田映劇。映劇のある場所はもともとそうした芸能の発信拠点だった。1917 年、現在の建物で「上田劇場」が開場し、昭和に入って映画が上演されるようになってから「上田映画劇場」と名称を変え、やがて現在の上田映劇になった。2011 年、観客数の減少と老朽化などを理由に一度閉館したが、2016 年に有志による「上田映劇再起動プロジェクト」がスタート、創立 100 周年の 2017 年に定期上映を再開し、復活を遂げた。そして現在は一つのスクリーンが朝から晩まで休む間もなくフル稼働。会員制度の発足、オリジナルグッズの製作、「上田映劇ジャーナル」の発行、カフェの併設など、さまざまな取り組みを展開している。

「僕自身も上田映劇には小さいころ、おじいちゃん、おばあちゃんに連れてきてもらっていて、『千と千尋の神隠し』『ハリー・ポッターと賢者の石』などの大作映画を観ていたのでなじみがありました。今、僕らがするべきことは、映劇周辺に人の流れを再びつくっていくこと。しかしもっと重要なのは 103 年続いてきた歴史のバトンを僕らの世代で落とすわけにはいかないということですね。この建物を守ることが大前提です。次の世代にこのバトンを受け渡すために何が必要なのか、ここを愛してくれる人たちをどうやって育てていくか、それこそが最大のミッションだと思っています」

大学では映画を学び、一時は監督の道も視野に入れていた長岡さんだが、卒業後の進路を模索している中で映劇の支配人に誘われ、ミニシアターの経営に新たな夢を見出した。リベルテと出会ったのも、そんなタイミングだった。

「今も館内に飾ってあるんですけど、2020 年 6 月の緊急事態宣言明けのオープン時にリベルテさんのメンバーさんが上田映劇のイラストを書いてくださったんですよ。めちゃくちゃうれしかったですね。そのころからメンバーさんの作品も取り扱っていて、今も3カ月ごとに商品を入れ替えにきていただいています。僕ら自身が作品たちにパワーをもらっていますよ、本当に。お客様もリベルテさんの商品を見て、かわいいと言って買ってくださったりもしている。ウチに置いてあることで、リベルテさんのことを知っていただける、そんな橋渡しになっているんじゃないかなと思います」

作品だけでなく、リベルテのスタッフやメンバーの存在自体が、長岡さんをはじめ映劇の皆さんの刺激になっているようだ。

「リベルテさんが目指している、単に作品を販売するに留まらず、アートを通してメンバー

さんと社会とのつながりをつくるという活動はとても素敵なことだと感じています。リベルテさんはそうした活動のパイオニアであり、実践できているのが強み。そういう視点は僕らも見習っていかなければと思っているんです。身体障害のある方が映劇に足を運んでくださったときに、建物の構造もそうですが、スタッフの我々自身がバリアフリーな存在でなければいけない。映劇はさまざまな方々に開かれているべきだし、映画をご覧いただいて、社会と出会う新たなきっかけにしていただければと思っています」

そんな映劇だって、ちくわを裏返している。だって廃業した映画館が復活して、今はまた地域の人びとの憩いの場になってるなんて、とてつもなくすごいことのはずだから。

ところでドーナツの穴を Google で検索してみた。大学の先生たちが考えを巡らせた書籍から、絵本、エロ漫画までと幅が広い。なさそうでありそうな穴について考察することは、誰にでもできて、無限の可能性を映し出してくれる。もしかしたらドーナツとドーナツの穴は、上田映劇と真っ白なスクリーンの関係に似ているかもしれない。

ながおか しゅんぺい　上田市出身。高校を卒業後、日本大学芸術学部映画学科に進む。2016 年、卒業後の進路を考えていたところに上田映劇準備委員会の中心人物で叔父でもある長岡秀貴氏から声をかけられ支配人に就任し、現在に至る。

ちくわがうらがえれば――内に持っているものが、何かの拍子に飛び出してくるようなことかな。
ルヴァン 信州上田店　甲田幹夫さん

今日はこの冊子の編集を担当している、くりもとさんがなんだかソワソワ、ワクワクしている。お家で自家製酵母のパンづくりをずっと続けていたのに、大事な大事な酵母菌をダメにしてしまったと嘆いていた。そう、ルヴァンの甲田幹夫さんは、その道の神様のような存在なのだ。「どんな人が話に来るの？」そう聞かれましたと、リベルテの担当者 N さん。私は神様はもしかして気難しい方なのかと身構えていたら、甲田さんはそよ風のようなおじさんだった。

「僕は今で言えばフリーターのような感じだった。のんびり生きてましたね。でも 30 歳を超えてから、さすがにちゃんとしないと、と思ったところで、自家製酵母のパンと出会ったんです。友達の紹介、紹介でそのパンの存在を知って、とあるお店に手伝いに行くようになったわけです。フランス人のプッシュさんという方が僕のお師匠さん。砂糖は使わずに小麦と塩と水だけでつくるパンは、フランスの伝統的な製法なんです。プッシュさんと出会ったころはまだ外国人と一緒に働くなんてことが珍しい時代。彼は日本の食文化を学びに来ていたんだけど、非常に頑張っていらっしゃいましたね。その背中を見ながら僕も学んだんですけど、面白かったなぁ。それまで3年頑張って1年休むという人生のパターンがあったのに、パンづくりを始めたら面白くなってそのまま 30、40 年経っちゃった」

上田市の柳町通りの真ん中に鎮座するルヴァンが入った古民家は、今や柳町の顔とも言える存在。隣の岡崎酒造さんは旅人をもてなす場であり、かの小林一茶も立ち寄ったという逸話が残っている。その岡崎酒造の持ち物でもある古民家には、かつて酒蔵で使う桶など木の道具を修理する専属大工さんが住んでいた。この街に甲田さんを誘ったのは、旧き良き街並みを残そうと考えていた岡崎酒造と蕎麦屋「おお西」のご主人たちだった。でも当初は現在リベルテのある建物を借りたかったのだそうで、実はそのころからリベルテとは縁のようなものがあった。

「リベルテさんに新しいスタッフさんがやってくると、どういうわけかうちのスタッフと仲良くなるんですよ。きっとうちもリベルテさんも、人を受け入れることに慣れているし、風通しがいいから惹きつけ合うのかな」

ルヴァンを卒業したスタッフは甲田さん調べでは 200 人におよび、十指を超える店舗が誕生している。リベルテもまた全国に静かにその名前が広がり、働きに、学びにやってくる人が多い。そんなところにも似た匂いが感じられると言えるかもしれない。

ルヴァンではリベルテのメンバーの作品展を行なったり、預けられた作品の販売をしたり、甲田さんが裂織りの商品を買いにいったり、あるいは売れ残ったパンを差し入れにいったりと、ご近所づきあいを常としている。中でもしゃれが効いているのが富士山の熨斗袋。

「うちでは毎年フジロックフェスティバルに出店していて。その慰労を兼ねて店のメンバー、ボランティアさんと飲むんですけど、リベルテさんで富士山の封筒をつくってもらって、それに金一封、というにはささやかな金額を入れて渡しているんです」

ひとしきり伺った後に、自家製酵母の話を聞く。パンづくりをする空間に酵母が棲みつくまで酵母起こしに失敗し続ける話。同じ材料でもその地域の空気やつくる人などによって全然違うパンができる話。店を舞台に何十年ぶりかで幼いころの同級生たちが愛称は昔のままに邂逅する話。パン屋からどこまでも紡がれていく縁（えにし）の話。それらを語る言葉に共通しているのは、甲田さんが抱く、目に見えないものへの畏敬の念かもしれない。くりもとさんもうれしそうにうなずいている。

「ちくわがうらがえる……本当は持っているはずなのに、何かの拍子に表に出てくる、おや？という表現のことかな」

きっと甲田さんのパンづくりもそんなふうに始まったのかもしれない。

こうだ みきお　上田市生まれ。パン屋「ルヴァン」オーナー。教師など数々の職に就いた後、ヨーロッパの伝統的なパン製法に出会う。1984 年に東京・調布で独立。1989 年に東京・富ヶ谷に直営小売店、1992 年にカフェ「ル・シァレ」、2004 年に信州上田店を開店。著書に「ルヴァンとパンとぼく」（平凡社）、「ルヴァンの天然酵母パン」（柴田書店）がある。

CM 撮影

［制作スタッフ］
■プロデューサー：わたなべみずほ　■カメラマン：村上圭一（と時々、佃梓）　■宣伝と出演：倉金信光、杉沢義光、MORO　■動画編集：しゃむ

新型コロナの感染が拡大する中でお世話になっているお店や団体、個人とリベルテの T シャツの CM を撮影した。QR コードを読み込むとその動画が見られる。

それは突然、2020 年 4 月の下旬に武捨さんがひらめいた。

「CM 撮影すればいいんじゃない。普段関わってくださってる方たちのところに行って T シャツ着てもらってお店の宣伝をしてもらえば」。

そこから怒涛の撮影がはじまり、4 月 24 日から 5 月 2 日までの間の 5 日で 7 本撮った。アポイントメントをとって（スタッフ各々）、撮影クルー（メンバー＋スタッフ）が出動して、15 分から 30 分ほどで撮影（カメラマン村上さん）して、テキスト編集して（テンプレートあり）、夜の間に編集（武捨さん）して投稿。

撮影当日は事前の打ち合わせも特になく、メンバーに「撮影行くよ」と声をかけ、大体、重雄さん、倉金さん、MORO さんがレギュラーメンバーで、カメラマン村上さん（佃さんのときもあった）と私（カチンコ係）で車に乗って現地へ。出演者は「CM 撮影なので宣伝してください」としか聞いてないので、なにをしたらよいのかという状況だった。挨拶もそこそこに T シャツに着替えていただき、村上さんと試し撮り。その間に私はメンバーに演技指導（とはいえ T シャツ持って立ってるだけだけど）。2,3 回練習して本番。「よーいスタート」ではじまって、「カットぉ」で終わる。

動画を見てくださった方はわかるかと思うが、だんだんみんな乗ってくる。ただし、それは撮影側が乗っているのであって、もっと言えばスタッフ側の話で（笑）。メンバーは一緒にやってくれるけど付き合ってくれているという感じ。それでも普段は座ってるだけであまり外に行かない倉金さんが CM 撮影のときは「仕事だよ」と声かけると返事よく立ち上がってハンチング（小道具）かぶる様子は普段を知っている私達スタッフだからこそ沸き立つ瞬間だったし、重雄さんが一張羅の白衣（ちょっとよくわかんない）をかばんに忍ばせていたけど結局本番では登場させずに後でみんなに格好つけて見せていたり、メンバーが私たちの遊びに付き合ってくれているのが原動力になっていた。もっと言うと、2020 年 4 月っていうのが志村けんが亡くなったあとで、緊急事態宣言が全国に出て、リベルテも営業形態少し変えたりしてなんかほんとに意識はしないようにしていたけれど明るい未来が見えてこないんじゃないかといういわゆる閉塞感が社会なのか自分の中になのか暗く厚い雲のように覆っていたときの CM 撮影というのが、一旦いろいろなんにも気にしないで遊べる！　という状況や気持ちにもっていってくれていた。ふりかえるとわたしたちスタッフが一番 CM 撮影を楽しませてもらっていたんだな。

一方でちくわがうらがえったなという瞬間があって、NPO 法人上田市民エネルギーのときが特にそうだった。出演者はいわば健常者でこの社会で“ふつう”に過ごせている人たち。それが撮影のときは多分緊張していて、普段よりストレスがかかっていた状態だった。そこにリベルテのメンバー、いわゆる障害者とよばれる人たちがリラックスした状態でいる。あわあわしている出演者の横や後方で「なにごとですか？　早くしてください」という顔で普段どおり“ふつう”に居るメンバーというのが、ちくわがうらがえるだった気がしている。

CM 撮影たのしかったなぁ。ちくわ、うらがえったかなぁ。そんな話もきいてみたかったです。

（リベルテスタッフ・CM プロデューサー：渡辺）

chairo　26bldg.　コトバヤ　Valuebooks Labo.　Seico Aoyagi

相乗りくん　ルヴァン　のきした　御菓子処 千野

MOSH!

こどもと障害を持つ人が交流する活動「MOSH!」。今年は上田市内の清明小学校 2 年生、第二中学校 1 年生とリベルテメンバーがともに、ダンボールやリベルテで制作している素材を使って、銭湯「竹乃湯」（2012 年に廃業）内に設置した木枠の家でオリジナルの「ホーム」をつくった。テーマは「あそび、つくり、まじる。まちにつくる、わたしたちのホーム」。つくった家のうちひとつは、本展会場に移築して展示した。（共催企画／主催：特定非営利活動法人上小地域障害者自立生活支援センター）

MOSH！は、小さい頃からいろんな人と出会って、楽しい時間を一緒に過ごすことを目的にしています。とかく福祉というと、“支援をする側／される側”という構造が成り立ちやすいのですが、この“ちくわがうらがえる”は、そんな構造を取っ払って、誰しもがもっている得意不得意を上手くお互いのために使い合える社会の実現をイメージしているのだと私は理解しています。このような目的のイベントを積み重ねていくことで、障がいのあるなしにかかわらず、誰もが安心して暮らせる地域を担う人材の育成につながるはず……と、願っております。

（上小圏域障がい者自立支援協議会　権利擁護委員　佐藤 永寿子）

当日はグループに入って下さったメンバーさんにアドバイスをもらい、嬉しそうに製作している様子が見られました。また、このイベントに多くの皆さんが関わってくれていることを知り、「学校から一歩外に出て、地域の方達と関わることは楽しい」という感想を持った生徒たちもいました。一つのイベントが実に多くの方達の協力によって成立していることを生徒が実感できたよい機会となりました。今後もリベルテのメンバーさんたちと共に何かを行ったり皆さんと共に過ごしたりすることを通して、生徒がどんなことに気づき、何を思うのか追ってみたいです。

（上田市立第二中学校　富山貴子）

2020 年
11 月 19 日（木）、20 日（金）
ワークショップ

上田市立第二中学校 1 年生の感想

■できあがった段ボールハウスは扉や窓がしっかりとしていてすごいな、と思いました。僕たちはダンボールに字を書いて紙を貼っただけだけど、リベルテのメンバーさんと少しでも交流できたことが良かったです。みんなで協力して一つのものをつくるのはいいな、と思いました。

■ダンボールハウスを見に行きました。クラスで行く前に、3連休で一足先に見てきたのですが、改めて見てみるとすごいし、中もなんかあったか〜い気がしました。

■竹乃湯に行き、ダンボールハウスを見てきました。ダンボールには、「HOME」や「mosh」の文字があり、それぞれ良い作品だと思いました。mosh の方々やリベルテの方々と一緒にできたことが良かったです。作るときメンバーさんに「M」のイメージをアドバイスしてもらい、イメージができ、文字をつくることができました。良い思い出になりました。

2020 年
11 月 21 日(土)～ 27 日(金)
展示@竹乃湯

2020 年
11 月 28 日(土)～ 30 日(月)
展示@roji

ちくわがうらがえるの企画には 2019 年 11 月位からお誘いいただき、会場探しや街歩きやダンボールハウスの企画（MOSH!）に参加しました。「ちくわ」という合言葉のもと、リベルテのスタッフさん・メンバーさんの総力が結集されたイベントだなあと感じていたのを記憶しています。私もすっかりちくわに練りこまれた（?）感じで、外からと内からと楽しく参加させていただきました。

MOSH! はその一環であったわけですが、普段静まり返っている竹乃湯が、子供達の声と明るい色彩でイキイキしていたのが印象的です。あの暖簾がとっても良かったです。大人たちもとても楽しい雰囲気で DIY していて、みんなでやればこんなにすごい事が出来てしまうんだ !! と改めて感じました。大人になると忘れてしまったり、余計なことを考えて前に進めなかったりすることがたくさんありますが、今回、全員でひとつのものを作り上げていく楽しさ、達成感などいろいろ感じることができました。皆様お疲れ様でした。

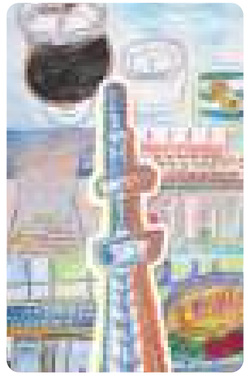
（26bldg. 宮嶋 絵美子）

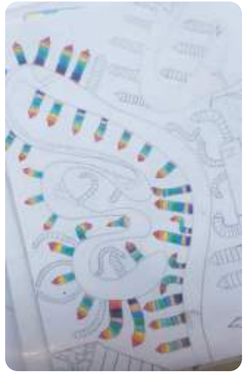
トランプ

オリジナルトランプは、新型コロナウイルスの影響で展示ができなくなった時に、作品集としての役割を果たしつつ、楽しんでもらえるものをというアイディアからはじまった。企画アドバイザーの山極満博さん、デザイナーの小松順子さんが協力してくれた。

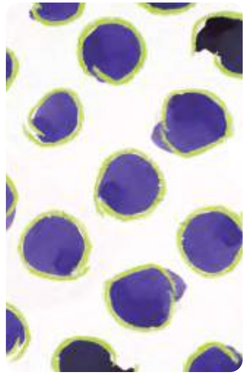
裏の絵や作品は、リベルテで日々制作を続けるメンバーだけでなく、スタッフやスタッフの家族がつくったものもある。絵柄がすべて異なるため、通常のトランプとして遊べない。しかし、ロイヤル・ストレート・フラッシュではアトリエをよく利用する顔なじみのメンバーがそろい、エースはリベルテを立ち上げる前に出会った古参のメンバー、ポーカーでいちばん弱い組み合わせはスタッフばかり、ジョーカーが代表・武捨というように、遊び心を込めた。また、表のトランプ柄は都筑勅子さんの手描きと、隅々までリベルテの色を出した。

一箱：3,000 円（税込）◎ちくわがうらがえるポーカーの取説つき





アカフクロウ



ショップ

正しくできるということが
どんなものなのか
思いつきやその場にあるもので
できることで試してみたり
やれそうなことを増やしてみたり
結果に見えるものは
いつも連続のまだ途中かもしれません

「うらがえり」の記録

野村政之

Facebook ページ「ちくわがうらがえる」のリンクから、特設ウェブページに飛んで、来場日時の予約。

上田市、旧北国街道の風情ある街並みの一角、NPO 法人リベルテの古いガラス戸を開けて中に入る。展示会場は 5 分ほど西へ歩いたところにある一軒家「roji」で、リベルテのメンバー、スタッフの皆さんと一緒に歩いて行くことになる。ビジュアルイメージとして使われている、あの空き家。庭の草が刈られていない、すすけた場所のように思える。

ドアの鍵を開けてもらって、「ちくわがうらがえる」の表札がついた空き家に入る。表札の飛び出した文字、上に乗った粘土製ちくわがかわいらしい。靴を脱ぐ。緑色の廊下。

階段を上がって 2 階に案内される。その部屋の窓からの情景をモチーフとした、5 人のメンバーによる絵がある。窓を開けて、外を見る。5 枚の絵と窓を行き来して見る。描き手はどういうところを見ていたのか。少し前、メンバーさんも窓辺のここに立って外をみていただろう。残像に重なる感覚。存在感。自分も見ているこの視界から、こういう情景が出てきたのかぁ～、と、絵の細かいところやフィクションな部分をどんどん見ていくことができる。さびれた感じがするこの空き家だけど、絵のなかは温もりがあったり、熱かったりする。描かれたこれはいつのことだろうかと思う。

2 階の隣の部屋は、木と箱のインスタレーション。これも、ここで考えたんだろうな、と想像のスイッチが入る。部屋の隅っこに、木っ端をあわせて置いてある。見ると、木っ端の長さと壁までの距離が合わなくて、一番端の1本が斜めに重なっている。ここピッタリきてなくてもいいのか!、と心のなかでツッコミを入れる。見ていくと、他の部分も微妙に不安定な状況がよしとされている。この整わなさは気楽だ。押入れの下の箱は、片付け忘れたのかと思った。そう思ったら壁にかかった絵まで含めて、色が部屋に浮いて浮き立ってきた。

1 階に降りる。遠慮なく壁一面に絵が貼られている部屋。スケッチブックやファイルも置いてある。かなりの量がある。かなりの量があるのだが、仕切られた2つの部屋に 1 人ずつが割り当てられた。既に亡くなられたメンバーさんの作品だという。亡くなられたからこそ、この量なのであり、この量が、現在なのである。今後もこれがその方々の現在で、増えることは無い。生きている者は自分の現在を選ぶ。たとえば最新作を自分の代表にする。新しい過去を生産し続ける。

少し開いたサッシの向こうに庭が見える、次の部屋。この半年くらいに、リベルテがやってきたことが展示されている。テレビで「のきした」の活動の映像。床の間の掛け軸が掛かりそうなところに、この展示にあわせてつくられたリベルテのトランプ 50 枚余りが並べられている。メンバーだけでなくスタッフも参加した図録ともいえる。また、ちくわがうらがえる MAP とともに QR コードが添えられ、今春～初夏にかけて SNS で発信されていたリベルテ制作による CM も見ることができる。新型コロナウイルスの影響で、家で PC やスマホを見ている時間の長い時期、「あの人今どうしてるかな?」という感じに、上田の街の皆さんの顔を見ることができたと感じていた。リベルテの皆さんの関わりがどういう温度なのか、ささやかに感じることができる。

「ちくわがうらがえる」展示期間中に、関連の別企画として展示された家みたいな作品が、会期の最後2日間、この部屋に移設されたのも見た。木とダンボールとかでできたあきらかに似つかわしくない大きさのモノが畳の上にたったのは、無茶で面白かった。

最後の部屋には、リベルテのグッズがぎっしり詰まっていて、買うことができる。「ちくわがうらがえる」グッズの T シャツとかトートバックも。

一軒家を出て、庭の隅の小屋が最後の展示場所である。なんとなく机とパソコンが設置されていて、リベルテがこの家を、展示会場として使うだけでなく、今後の事業で使用するために借り上げたのだということがわかる。

これはとても興味深いことだ。

空き家をアートで使う、転用するという場合、だいたいは既に住人がいない、用済みになってしまった家を、本来と違う形で扱う。家としては過去に属し役割を終えたものとして、アート用に改造される。生活から切り離される。

…というか、アートであれ宝物であれ、展示されるものは過去のものだ。創り終わったものが、展示される。考えてみればそうである。

でもこの家 roji は、これから新たな住人を得て生活の場を提供する。未来に向けた起点として今回の展示はあったのだ。と、気がついた。

…と考えると、2 階の窓の部屋で見た絵、現実の窓からの景色にはないさまざまなイメージ～犬だったり猫だったり抽象的なものも、これからやってくる未来のイメージなのだ。未来予想図。時制が「うらがえる」のだ。

これからこの場を生活の一部とするリベルテのメンバーさんが、空っぽの家で窓の外をみて想像したことがタネとなって、「ちくわがうらがえる」の場が開き、観客の他人たちも一緒になって、文字通りの空き家「再生」を祝う。この家に新しい空気をゆきわたらせている。矢印が未来に向いている。

roji をあとにして、ちくわがうらがえる MAP を手に街に出る。上田の街の通なお店にいる昆虫（粘土で作られた虫）を見つけにいったり、千野菓子店の琥珀糖、ソワンカフェのデザートプレートを食べにいったり。

roji をくぐったことで、上田の街を歩く自分に少し、リベルテと街のつながりが重ねあわされる。

ソワンカフェではリベルテメンバー・石合昌史さんの絵が展示された。その絵から発想したデザートプレートが注文できる。どんなものかと思ったら、絵を描くパレットに見立てた一皿が出てきた。食べ物ってこんなに彩り豊かなんだな。と、改めて感じ、絵の具のような 5 色のジャムやソースをナイフで塗りながらケーキやガレットを食べた。味と色を楽しみながら、自分が絵を描いているというか何かクリエーションしている感覚。面白い!

いたく感動して知らぬフリも申し訳ないと思って、レジで感想を伝えると、とても喜んでくださった。そして、石合さんとソワンカフェの皆さんはリベルテで絵を描き始めるよりも前からの関係であること、最近までの石合さんとの関わりや思いをお聞きすることができて、界隈の景色の中に石合さんがいるさまが頭に浮かんだ。

以上が、私が会期中何度か「ちくわがうらがえる」の現場に行って経験したことを、小説風に構成したものである。

企画アドバイザーということで、私は山極満博さんとともに、企画段階から約 1 年に渡り武捨さん、新田さん、リベルテの皆さんの相談相手という役回りであった。「ちくわがうらがえる」とは一体何のことか、出された謎について考えた。武捨さんがこの企画に対する願いとしてよく言ったのは「観客の人たちに、メンバーさんの目線で街をみてもらいたい」とか「この街にメンバーさんが生活しているということを感じてもらえたら」ということだった。

演劇を自分の主たるフィールドとしてきた私の応答は、「観客におまじないがかかった状態で街に出てもらうことが必要」であった。「おまじない」というのは、たとえばタバコが吸いたい人には街角にある灰皿が目に入ってくるし、GoTo トラベルの地域共通クーポンを持たされた人は使える店かどうかが常に気になる。そういうふうに、リベルテの街とのつながりがなにか意識に入ってくることが必要だと思った。

新型コロナウイルスの流行もあり「ちくわがうらがえる」自体をどういう形で行い、何をどういう順番で観客に体験してもらうのかなども変転して、あんまり全体像がわからないまま期間に突入したのだが、こうして体験したことを綴ってみるとどうだろう。自ずと、しっかりと、当初念頭においていた方向で着地しているのではないかと思えてくるから、不思議なものだ。

のむら　まさし

長野県塩尻市出身。演劇を中心に文化・芸術の企画プロデュースや創作活動におけるアーティストの相談相手、地域の文化芸術団体への公的支援にかかわる仕事に並行して携わる。東京で劇場勤務と演劇活動、沖縄で県内文化芸術団体への支援に携わったのち、2018 年 10 月より長野県県民文化部文化政策課文化振興コーディネーター。全国小劇場ネットワーク代表、舞台芸術制作者オープンネットワーク理事。 長野市在住。

はじまりとプロセス

「ちくわがうらがえる 」は構想 3 年、実際に動き出したのは 2019 年 11 月にさかのぼる。はじまりから終わりまでのプロセスを記す。

2019.11.20（水）
空き物件街歩きツアー 1　10:00 〜 15:00
ガイド：宮嶋絵美子（石井工務店 26bldg.）企画アドバイザー：野村政之（演劇制作者・ドラマトゥルク）
山極満博（アーティスト） 元島生（NPO 法人場作りネット副理事長）
メンバー：S.S.G.　花立　聡子　モロ　Mariko　ハーメルン　higipom　七海　スタッフ：武捨　新田

2020.01.17（金）
14:00 〜 15:00 上田市立美術館（係長 / 広報担当）提携して何かできたらいいなぁ。
場所を借りることができるかなぁ？　などを相談に行く

2020.02.06（木）
ちくわ街歩きツアー 2　10:00 〜 12:05
山極　メンバー：S.S.G.　AN　七海　武捨　村上　新田
・これまでの進捗状況の説明、メンバーや作品の紹介、制作している現場を見学、意見交換
（ふりかえり、今後のことやイベントの構想など）
・海野町通りの旧呉服屋さんへ再度物件を見学　15:00 〜 16:00 のどこかで　宮嶋

2020.02.23（日）
打ち合わせ　野村　武捨

2020.03.18（木）
ちくわ街歩きツアー 3　10:00 〜 15:00　山極　野村　メンバー：higipom　那月　武捨　新田
AM 話し合い / 作品を観る、PM 作品観る / 空き物件ツアー 15:00 頃〜　宮嶋

2020.04.08（木）
ちくわだよ全員集合！（来られる人）11:00 〜 15:00　ゲスト：野村
ちくわツアー + プレお弁当をつくる会（準備・買い物 16:30 〜 調理 18:30 〜 片付け 20:30 〜）
展示構成、ツアー動線、関連イベント、トランプ制作に関しての具体的な話 / スケジュールを決める / ゲストと一緒に買出し調理、具材をお弁当箱に詰め込んでお話しながら食事を共にする「プレお弁当をつくる会 」→　コロナ緊急事態宣言で中止となる

2020.04.16（木）
13:00 〜 14:45 web 会議　山極　野村　武捨　新田
コロナ禍でどんなことが可能か？　イベントを開催する方法や進め方についての打ち合わせ

ドネイションチケット作成しようかな？　と思いつく→お金として循環するアートプロジェクト
作品としてチケットを販売 / チケットは後々グッズに交換可能 / チケットは回収し、チケット購入者のサインを入れて展示 / 有効期限 100 年 / 手書きのイラストにゴムハンコ循環する

2020.04.18（土）
最越あるとの電話相談室第一弾　メンバー：最越あると

2020.04.22（水）
最越あるとの電話相談室第二弾
電話で #ちくわがうらがえるについて電話相談の打ち合わせを行い録音し、YouTube で配信（新型コロナの影響でお休みのメンバーの在宅支援としての電話相談をヒントに！）
24 時間リベルテラジオ(超短波放送)の構想を思いつく　半径 1 km 以内で放送を流すという試みはどうかな？

2020.04.24（金）
T シャツ CM 動画撮影　@ Chairo Store Ueda
よしざわまほ & ほのか　メンバー：倉金　おしげ　撮影：村上　渡辺

2020.04.25（土）
T シャツ CM 動画撮影
@26bldg.　宮嶋　メンバー：都筑　倉金　杉澤
@コトバヤ　高橋さとみ　メンバー：倉金　モロ　撮影：佃　渡辺

2020.04.28（火）
・今井浩一（ライター）と Zoom で打ち合わせ　13:00 〜 14:30　武捨　新田
リベルテの日常やリベルテの周辺、また上田の街のことのルポをお願いできたらいいなを相談
・T シャツ CM 動画撮影 @ Value Books Lab.　池上幸恵　@ Seico Aoyagi 宅　Seico Aoyagi (デザイナー)
メンバー：倉金　モロ　撮影：村上　渡辺

2020.04.29（水）
Zoom 会議 13:00 〜　山極　野村　武捨　新田

2020.05.01（金）
T シャツ CM 動画撮影　@ NPO 法人上田市民エネルギー
藤川まゆみ　金澤みち代　メンバー：おしげ　倉金　Mariko　撮影：村上　渡辺

2020.05.02（土）
T シャツ CM 動画撮影　@ルヴァン信州上田店
甲田幹夫　メンバー：倉金　モロ　杉澤　撮影：佃　渡辺

2020.05.05（火）
T シャツ CM 動画撮影　@犀の角
荒井洋文（犀の角代表）　荒井舞　メンバー：倉金　Mariko　撮影：村上　渡辺

2020.05.12（火）
トランプ制作打ち合わせ　小松順子（デザイナー） 武捨　新田
トランプのデザイン、遊び方、スケジュール的なことの相談をする

2020.05.13（水）
Zoom 会議 13:30 〜　山極　野村　武捨　新田

2020.05.16（土）
T シャツ CM 動画撮影　@御菓子処 千野　千野雅芳　撮影：村上　渡辺

2020.05.29（金）
打ち合わせ 13:30 〜　山極　武捨　新田
展示会場となる roji の物件見学 / 展示アイデア出し / トランプの絵柄についての話をする

2020.06.03（水）
企画についてのテキストを作成　アートイベント「ちくわがうらがえる」で伝えたいことが明確になる。「あなたの世界が世界をかえる」意味不明なテーマでイベントをつくりたい。例えばアイドルを描くメンバーは繰り返し一見わかりづらいが女性を描いている。その彼女の世界に立てば、彼女は本当のアイドルを描いている。わからないことでもその人の世界を手放しで信じてみることでリベルテはできてきた。それをアートイベントにしたい。

2020.06.05（金）
MOSH! 打ち合わせ会議　11:30 〜　武捨

2020.06.11（木）
10:00 〜 14:00　トランプ表面に印刷するメンバーの作品を選ぶ　山極　小松

2020.06.26（金）
13:30 〜 16:00　山極　小松　トランプの作品選びの続き
16:15 〜　トランプとポスターのデザインの打ち合わせ 小松　武捨　新田

2020.07.02（木）
9:00 〜 12:00　メンバーの作品をトランプ用に撮影する　撮影：村上圭一

2020.07.03（金）
リベルテ取材と打ち合わせ　11:00 〜 14:00　今井　武捨　新田　メンバーの取材後、街歩きのルポについて打ち合せる → 9 月ごろから何回かに分けて実施。最終的に記録集に掲載する。

2020.07.21（火）
トランプ用メンバーの作品の撮影　撮影：村上

2020.07.23（木）
リベルテ取材　11:00 〜　今井　倉金　七海　渡辺

2020.07.24（金）
窓展チーム roji 2 階窓見学　13:30 〜
メンバー：AN　みのり　聡子　嘉澄幸村　S.S.G.　武捨　佃　村上

2020.07.28（火）
トランプ用 メンバーさんの作品の撮影　撮影：村上

2020.07.29（水）
チラシの打ち合わせ　小松　武捨　新田

2020.08.06（木）
リベルテ取材　13:00 〜 16:00　今井　モロ　都築　佃

2020.08.12（水）
トココトメンバーと展示会 / 御菓子処 千野ヘマーリン和菓子のお願い /soin cafe 石合昌史の作品展示と創作料理の構想を伝える → 野村

2020.08.20（木）
御菓子処 千野　打ち合わせ　15:00 〜 16:00　和菓子制作の相談

2020.08.27（木）
・soin cafe　17:00 〜　MASASHI ISHIA! 展のお願いと作品をモチーフにした創作料理のご相談
・丸子中央病院クリスマスイルミネーション打ち合わせ　10:00 〜　@丸子中央病院　武捨

2020.08.29（土）
ちくわハンコ打ち合わせ 11:00 〜　@コトバヤ　高橋　武捨

2020.09.03（木）
MOSH! 打ち合わせ会議 13:00 〜　武捨

2020.09.05（土）
ソロソロ、コロナトークイベントをする旨を連絡 → 野村　犀の庭とともに打ち合わせ

2020.09.09（水）
御菓子処 千野のこはく糖試作（マーリンの絵をイメージしたもの）の写真を送る → 山極　野村
お菓子のパッケージのラベルを今後考えていく

2020.09.10（木）
ソロソロ、コロナ ゲストの野川未央（NPO 法人 APLA 事務局長）と Zoom 打ち合わせ
メンバー：最越あると　武捨　新田

2020.09.11（金）
・ソロソロ、コロナのきした CM 撮影　11:00 〜　@リベルテ新棟前
はねだひろし（看護師、フリースクールプルームスタッフ、NPO 法人場作りネット理事長）
元島　メンバー：モロ　倉金　Mariko　おしげ　武捨　渡辺　村上
・午後〜　ソロソロ、コロナ打ち合わせ　元島　武捨　新田

2020.09.15（火）
・山森裕毅（哲学者）とソロソロ、コロナの打ち合わせ　18:00 〜　武捨
・窓展、MOSH! 打ち合わせ 武捨　佃　村上

2020.09.17（木）
ちくわがうらがえる記録集初打ち合わせ　くりもときょうこ（編集者） 小松　新田

2020.09.19（土）
ソロソロ、コロナトークイベント　16:00 〜 20:30　@犀の角
山森　野川　元島　荒井（洋文） 武捨　新田　佃　渡辺

2020.09.22（火）
MOSH! 打ち合わせ会議　武捨　佃

2020.10.06（火）
・トランプ入稿データをトランプ印刷会社へ送る
・MOSH! 打ち合わせ　武捨　佃　村上

2020.10.07（水）
ポスターなど配送用の準備を始める　金川ひろみ（ボランティア）にお手伝いいただく

2020.10.08（木）
・「ちくわがうらがえる」MAP について打ち合わせ　10:30 ～　Seico Aoyagi　武捨　渡辺
・「ちくわがうらがえる」街歩き取材　上田市民エネルギー / 御菓子処 千野
　今井　くりもと　撮影：村上　案内：新田
・丸子中央病院イルミネーションについて、デイサービス sora とやり取りが始まる
・soin cafe 打ち合わせ　17:00 ～　メンバー：石合　武捨
・「S.S.G. の昆虫採集展のご案内」を参加店舗 8 店舗に Messenger で送る

2020.10.13（火）
・マーリンこはく糖ラベル打ち合わせ　15:00 ～　御菓子処 千野　小松　武捨　新田
・「ちくわがうらがえる」本展 roji の展示の打ち合わせ　武捨　村上

2020.10.14（水）
「ちくわがうらがえる」街歩き取材　上田映劇 / 本屋未満 /Value Books Lab.
今井　くりもと　撮影：村上　案内：新田

2020.10.15（木）
・MOSH! 打ち合わせ　15:00 ～ 16:00　武捨　佃　村上
・ちくわがうらがえるトランプが届く、roji 展示準備など始まる

2020.10.17（土）
こはく糖ラベル打ち合わせ　16:00 ～　武捨

2020.10.20（火）
昆虫採集展始まる　昆虫採集展参加店舗にリベルテへ昆虫を取りに来てもらう

2020.10.21（水）
MOSH! 打ち合わせ会議　17:15 ～　武捨　佃

2020.10.22（木）
「ちくわがうらがえる」街歩き取材　26bldg. / 犀の角　今井　くりもと　撮影：村上　案内：新田

2020.10.24（土）
窓展 roji へ作品搬入

2020.10.27（火）
「ちくわがうらがえる」街歩き取材　コトバヤ　今井　くりもと　撮影：村上　案内：新田

2020.10.29（木）
soin cafe　作品搬入　メンバー：倉金　新田

2020.10.30（金）
「ちくわがうらがえる」MAP 届く

2020.10.31（土）
「ちくわがうらがえる」roji 内覧会　日本財団 吉田もも　野村　山極（満博）　山極則明　宮嶋など

2020.11.01（日）
「ちくわがうらがえる」本展および関連イベント スタート

2020.11.03（火・祝）
イルミネーション展示什器作り　10:00 ～　@リベルテ　八反田貴史（デイサービス sora 管理者）　武捨

2020.11.07（土）、21（土）、23（月）、28（土）、29（日）
千曲高校生ボランティアがお手伝いに来られた

2020.11.10（火）
「ちくわがうらがえる」街歩き取材　ルヴァン信州上田店　今井　くりもと　撮影・案内：村上

2020.11.13（金）
MOSH! 打ち合わせ会議　17:15 ～　武捨　佃

2020.11.16（月）
丸子中央病院イルミネーション設営　武捨

2020.11.17（火）
・昆虫採集展撮影　@参加店舗　撮影：村上
・丸子中央病院イルミネーション点灯式

2020.11.19（木）
・MOSH! 清明小学校　9:30 ～　武捨
・丸子中央病院イルミネーション 突風により破損し中止

2020.11.21（土）
MOSH! 展示始まる　@竹乃湯

2020.11.22（日）
昆虫採集展撮影　@参加店舗　撮影：村上

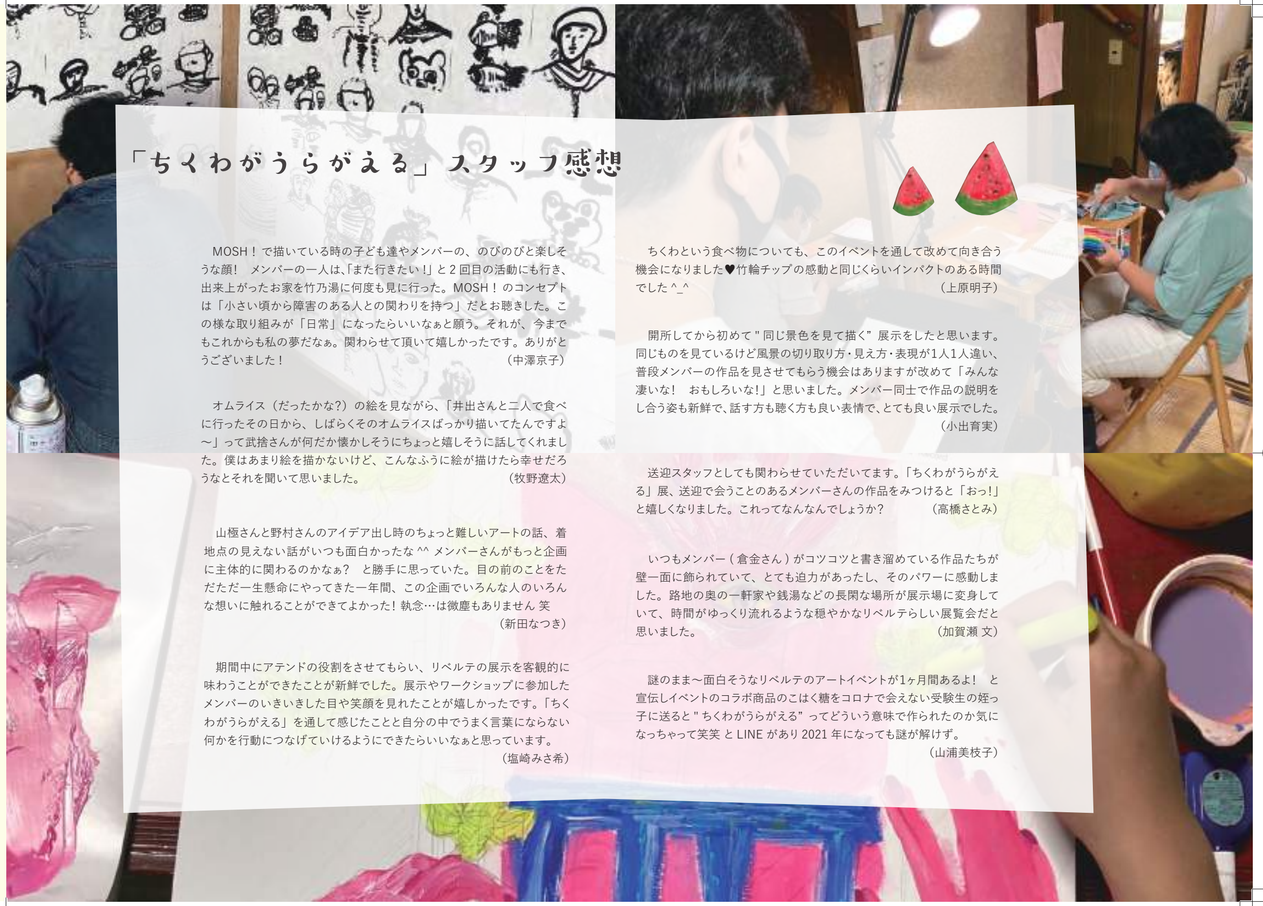
2020.11.28（土）
MOSH! 移築　竹乃湯 → roji

2020.11.30（月）
本展展示 関連イベント 終了

2020.12.16（水）
ちくわがうらがえるふりかえり会　16:30 ～ 19:00　@犀の角
荒井（洋文）荒井（舞）くりもと　小松　千野　長崎航平　八反田　野村　山極　伊藤　黒岩　塩崎
佃　中澤　村上　渡辺　新田

2021.01.14（木）
soin cafe ふりかえり会　18:30 ～　@ soin cafe
高橋真弓　樋口郁映　石合　野村　黒岩　新田

※敬称略



「ちくわがうらがえる」スタッフ感想

MOSH！で描いている時の子ども達やメンバーの、のびのびと楽しそうな顔！　メンバーの一人は、「また行きたい！」と 2 回目の活動にも行き、出来上がったお家を竹乃湯に何度も見に行った。MOSH！のコンセプトは「小さい頃から障害のある人との関わりを持つ」だとお聴きした。この様な取り組みが「日常」になったらいいなぁと願う。それが、今までもこれからも私の夢だなぁ。関わらせて頂いて嬉しかったです。ありがとうございました！
（中澤京子）

オムライス（だったかな?）の絵を見ながら、「井出さんと二人で食べに行ったその日から、しばらくそのオムライスばっかり描いてたんですよ～」って武捨さんが何だか懐かしそうにちょっと嬉しそうに話してくれました。僕はあまり絵を描かないけど、こんなふうに絵が描けたら幸せだろうなとそれを聞いて思いました。
（牧野遼太）

山極さんと野村さんのアイデア出し時のちょっと難しいアートの話、着地点の見えない話がいつも面白かったな ^^ メンバーさんがもっと企画に主体的に関わるのかなぁ?　と勝手に思っていた。目の前のことをただただ一生懸命にやってきた一年間、この企画でいろんな人のいろんな想いに触れることができてよかった！執念…は微塵もありません 笑
（新田なつき）

期間中にアテンドの役割をさせてもらい、リベルテの展示を客観的に味わうことができたことが新鮮でした。展示やワークショップに参加したメンバーのいきいきした目や笑顔を見れたことが嬉しかったです。「ちくわがうらがえる」を通して感じたことと自分の中でうまく言葉にならない何かを行動につなげていけるようにできたらいいなぁと思っています。
（塩崎みさ希）

ちくわという食べ物についても、このイベントを通して改めて向き合う機会になりました♥竹輪チップの感動と同じくらいインパクトのある時間でした ^_^
（上原明子）

開所してから初めて " 同じ景色を見て描く" 展示をしたと思います。同じものを見ているけど風景の切り取り方・見え方・表現が1人1人違い、普段メンバーの作品を見させてもらう機会はありますが改めて「みんな凄いな！　おもしろいな！」と思いました。メンバー同士で作品の説明をし合う姿も新鮮で、話す方も聴く方も良い表情で、とても良い展示でした。
（小出育実）

送迎スタッフとしても関わらせていただいてます。「ちくわがうらがえる」展、送迎で会うことのあるメンバーさんの作品をみつけると「おっ!」と嬉しくなりました。これってなんなんでしょうか?
（高橋さとみ）

いつもメンバー (倉金さん) がコツコツと書き溜めている作品たちが壁一面に飾られていて、とても迫力があったし、そのパワーに感動しました。路地の奥の一軒家や銭湯などの長閑な場所が展示場に変身していて、時間がゆっくり流れるような穏やかなリベルテらしい展覧会だと思いました。
（加賀瀬 文）

謎のまま～面白そうなリベルテのアートイベントが1ヶ月間あるよ！　と宣伝しイベントのコラボ商品のこはく糖をコロナで会えない受験生の姪っ子に送ると " ちくわがうらがえる" ってどういう意味で作られたのか気になっちゃって笑笑 と LINE があり 2021 年になっても謎が解けず。
（山浦美枝子）

「ちくわがうらがえる」をふりかえる会

2020 年 12 月 16 日に「 ちくわがうらがえる 」のふりかえり会を 犀の角で開催した。 その時、参加者から出た感想を一部抜粋する 。

※千野雅芳さん（御菓子処 千野）の発言は P40 に収録しています。

“幻の展示”（丸子中央病院のイルミネーション展示）に参加させていただきました。お話しをいただいて、私が勤める高齢者福祉施設の利用者の方々が紙に筆と墨でしたためた書と、リベルテの倉金さんの作品、イルミネーションを組み合わせることになりました。リベルテさんでは、常識が裏返る場面が多くて、そのことを「ちくわがうらがえる」と表現されていました。私が勤める施設の利用者の方々は、病気になってしまった自分、社会的な役割を失ってしまった自分について毎日葛藤されています。そういった方々がどんな一文字を絞り出すかというところに、一番時間がかかりました。

（デイサービス Sora：八反田貴史）

roji の展示を見に平日の昼間に出かけて、本当に静かでシーンとしている中で見せてもらいました。これまでも何度かリベルテさんに伺ったことはあって、メンバーさんとは「こんにちは」ってあいさつする程度でした。お 2 人の亡くなったメンバーさんの展示は、すごい膨大な数の作品や分厚いスケッチブックも置かれていて。そこに、自分たちと変わらない普通にちゃんと人生を送っている人なんだと感じられたのは、とても良かったと思います。

（デザイナー：小松順子）

街歩きでリベルテと関わりのある方々の取材に同行して、お話自体も非常に面白かったし、リベルテが上田の街の中に “漏れ出ている” ことを感じました。漏れ出ているのか染み出ているのか、とにかくジワッと溶け込んでいる感じがあります。記録集の編集者として関わりはじめましたが、なかなか全体像が把握できず、これで全部かと安心したら、いやまだあるっぽいみたいな感じで……そういうところも、すごく面白いと思ってます。

（編集者：くりもときょうこ）

分かんないものがこういうふうに街の中にあるということが、以前の私だったら恐怖でしかなかったです。今は、その分からないものがあることがすごくうれしいし、そこに向かって「どうすればいいんだろう」と考えて「分かんなかったけど、やってみよう」という動きがあることが、すごく温かくて好きでした。前は「障害」について分からなくて恐怖だったところがありましたが、「何でこんなことを考えられるんだろう」とわくわくさせられる方々ばかりなので、これからもそういう分かんない人たちと一緒におしゃべりできたら楽しいと思っています。

（リベルテ送迎スタッフ、犀の角スタッフ〈照明・制作〉：伊藤茶色）

僕が一番印象に残っているのは、積んだ木っ端とかがある部屋です。あの木っ端の作品がどういう思いで作られて、どういう意図があるのかも、本当に全く見当もつかなくて。福祉に関する知識が本当に全くないんですけど、「やってあげてる」感があるとしたら、めちゃくちゃ嫌だなと思っていました。この「ちくわがうらがえる」の展示がなかったら、そういうことすらも気付けなかったので、今後もこういう企画を僕はすごく楽しみにしています。

（MOSH! の家搬入ワークショップ参加者：長崎航平）

roji の展示をアテンドしたときに、リベルテはもともと知ってくれているけど、「ちくわがうらがえる」という企画で展示を初めて見に来たという方に対して、やっぱり説明し尽せ ないという思いが残りました。もちろん、全部伝える必要はないんだろうけど、でもこれを自分たちの中だけで残してしまって誰にも伝えないのは、ちょっともったいないなという気がして。ちくわがうらがえるは、実際に表に現れてきたものだけではないので展示に至るまでの過程も全部含めて記録として残さないといけない気持ちが強かった。記録集を作る人、ちくわに関わった人、地域の人と文字だけでは伝えられない空気感?の共有をしないといけないなと。そのための共有の場としてのふりかえり会だったんですよ。

（リベルテ：渡辺瑞穂）

普段のリベルテの活動は、その人が描きたいもの作りたいものを、その人の調子で取り組む。それがリベルテ特有の空気感の一因になっているのだけど、今回のちくわがうらがえる窓展では、人に見られるものを期限内に作らなければならなかった。いつもはそれぞれの画風があるが、今回は同じテーマ、大きさも一緒。いろんな制約があるなかで、人によっては吐きそうなくらいのプレッシャーがあったんじゃないかと思う。けれど、そのことで普段押さないスイッチが押されたり、誰かと比べたり、牽制したり。そういうヒリヒリ感があるリベルテもすごく良かった。

（リベルテ：佃梓）

リベルテがどう見られているかという話がありましたが、僕はその “見られ方” を想像力というものにしてほしくないと思ったんですよね。「普通、一般という定義はどこにあるんですか?」という話を最初にかなりして、今は社会を形成する側に常識がないと感じられるからこそ、“見られる” という想像力ではなく、「リベルテは今の社会をどう見るのか?」というようにひっくり返して、今後活動していってほしいです。そんな風に切り込めば、アートになると思います。

（企画アドバイザー・美術家：山極満博）

あまり想像がつかないところなんですが、リベルテの皆さんが、日々のやり取りや活動をどう作品に昇華されるんだろうか? そこがやっぱり一番面白いところかなと。そこを見たいと思った時に、そのモチベーションや演出で重視したところ、個々の障害がある人の意図、魂がどうであるかということの表明になっていたかを振り返ると、そのあたりのことはあまり整理されないまま展示として表現されているという感じがしました。

（犀の角：荒井洋文）

一般に障害者福祉というものは「社会や人間の関係の障害」であり「アクセシビリティの問題」だと思っています。そうしたときに、このプロジェクトにおいてアクセシビリティが十分だったかという課題は、よく考えたほうが良いと思います。展示を見たくて、Web サイトには行ったけど、リベルテの玄関まで行ったけど、展示を見られなかった、という人がいるんです。

（企画アドバイザー・ドラマトゥルク：野村政之）

この企画が進んでいくのを見ていて、武捨さんがどこまで本気なのかが見えないなっていうのが、正直な感想です。福祉のことはあまり分かってないんですけど、ちゃんとメンバーさんの作品を見せる場をつくることができたのは良かったいう気はしています。個々の作品の良さみたいなものを、どこまでちゃんと見せられるか。これ 1 回で終わるのではなく、2 年毎でもちくわを続けることができるか、が課題かな。そんな感じ。

（リベルテ・アート総務：村上圭一）

全容が見えなくて、「分からないけれども何か面白そう」というところがまず印象としてありました。実際の展示を見て、「アートって本当は何なんだろう?」とか、いろんなことを考えました。リベルテのメンバーさんが全員アーティストなのかそうではないのかとか、これがアートなのかアートではないのかとか、ただそういうことをいろいろ考えていました。メンバーさんたちも、こういう作品を作ったり展示したりすることをどういうふうに思っているのか、聞いてみたいです。

（犀の角：荒井舞）

※敬称略

ちくわがうらがえる記録集
2021 年 3 月 31 日　第 1 刷発行

発行者：武捨和貴（しゃむ）
発　行：NPO 法人リベルテ
長野県上田市中央 4-7-23　電話　0268-75-7883
メールアドレス info_lbrt@npo-liberte.org

企画アドバイザー：山極満博　野村政之
取材 / 文：今井浩一（pp.41 ～ 48）
写　真：村上圭一〈CBP〉（pp.1 ～ 26、33、34 右～ 37、40 右、41 ～ 48、52 ～ 61、67 ～ 69）
装丁 / デザイン：小松順子
編　集：くりもときょうこ
後　援：長野県　上田市　上田市教育委員会　信濃毎日新聞社
共　催：のきした ソロソロ、コロナ　特定非営利活動法人上小地域障害者自立生活支援センター MOSHI!

展示・イベント参加者：
AIKA　あかね　ayano　荒井洋文　荒井舞　AN　池上幸恵　いづる　井出勝利　今井浩一
上田市立第二中学校 1 年生　S.S.G.　n　F.M.　Emi　Eriko　小野澤賢央　GAKU　嘉澄幸村
金澤みち代　金川ひろみ　カラフルーナたいすけ　キャットミントサイダー　倉金伸光
くりもときょうこ　甲田幹夫　東風天理　小松順子　佐藤永寿子　佐藤美穂　澤井秀二
しげしげ　杉沢義光　Seico Aoyagi　相馬朋未　空色工房　たおやか市　高橋さとみ　高橋真弓
竹内聡子　千曲高校生ボランティア　千野雅芳　綱島美絵　富山貴子　TA-4　なおみ　長崎航平
長岡俊平　南部消防署前　西沢美枝　ネモやん　野川未央　野村政之　八反田貴史　はねだひろし
パン娘　higipom　樋口郁映　ひつじ丸　平林恵美子　藤川まゆみ　マーリン　MASASHI ISHIAI
Mariko　Misaki　Mr.D　みのり　宮嶋絵美子　最越あると　もとしましょう　MoRo　Yuki
山極満博　山崎めぐみ　山森裕毅　ゆず　yuma　よしざわまほ & ほのか　Leo　y　若林広

協力（スペシャルサンクス）：石井工務店株式会社　一般社団法人シアター＆アーツうえだ　NPO 法人上田映劇
NPO 法人上田市民エネルギー　御菓子処 千野　コトバヤ　soin cafe　Chairo Store Ueda
デイサービスSora　ステンドグラスまどいろ工房　特定非営利活動法人場作りネット　26bldg.
Value books Lab.　papetree　フリースクール プルーム　本屋未満　ルヴァン信州上田店

助　成：日本財団

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で定められた場合を除き、著作権の侵害となります。